Lv20

mori

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｖ２０

【Ｎコード】
Ｎ８１６７Ｙ

【作者名】
ｍｏｒｉ

【あらすじ】
Ｌｖが２０までしか上がらない、勇者にはなれない主人公が勇者や仲間と共に魔王討伐を目指すお話です。主人公の戦い方はむしろＦＦよりになるかもしれません。重い話はきっと最初の方だけの…ハズ。

第一話（前書き）

初めての作品です。
誤字脱字、駄文等あるでしょうが完結目指していくのでよろしくお願いします。

第一話

誰だって一度は「主人公」に憧れたことがあるだろう。
一国一城の主となる「王様」。
世界を股にかけ未知の秘境や宝を探しだす「冒険家」。
魔物はびこる城にて運命の相手を待ちわびる「お姫様」。
そして魔物より姫を救い出し、世界を平和へと導く「勇者」。

きっと誰もが自分もこうなってみたいと夢を見る。
しかし人生を生きていく中で自分の力を知り、妥協点を見つけていく。
そしてその中で幸せを掴んでいく。
それは当然のこと、だって誰もが「主人公」になれるわけではないのだから。

ここはとある城下町の一角にある民家。
今まさにここで新しい命が産まれようとしていた。

……おぎゃあ！！おぎゃあ！！

バンッ！という勢いの良い音と共にドアが開かれる。

「産まれたか！レイ！」

青いバンダナを巻いた青年がベッドに横たわる女性に声をかける。

「えぇ、無事に産まれたわあなた〜…。」

「そうか！頑張ったな！」

それを聞いた青年は妻に抱きつきたい衝動に駆られるが、
さすがに出産直後にそれはまずいだろうと思い留まる。

ふと目をやると部屋の机の上で産婆の手により
産湯に浸かる我が子を見つける、近づいていくと
産婆は青年に気づき笑顔で声をかける。

「元気な男の子ですよ、レイさんも健康そのものです。」

「ああ、ありがとう！助かったよ婆さん。」

やがて赤ん坊、妻に対する処置も終わり産婆が帰っていった。
部屋に残ったのは青年とその妻、そしてその２人の愛の結晶のみ。
母に抱かれ眠るわが子を見ながら青年は立ち上がり言った。

「お前とこの子はどんなことがあっても、絶対に守ってみせる！」

「あらあら別に危険なわけでもないのに〜、でも嬉しいわ、うふふっ、それで名前は決めているの〜？」

夫の言葉に頬を染めながらも嬉しそうな顔で妻は答える。

「もちろん決めてるさ、この子の名前は…」

これが後の世に魔王を打倒する勇者…の仲間であり、
自分の力を決して諦めなかった一人の人間の物語のはじまりの日である。

第二話

「ふぅ…」

日課となっている走り込みを終えて、汗を拭きつつ家に向かう。

ここは世界の南に位置する大陸にある城、アリアハン。
かつては全ての大陸を支配する大国であったが、
過去に起きた戦争が原因で現在は他国との交流を絶っている…らしい。
その城下町の外れにある民家、表札には「ロック&レイ&ウィル」と書いてある。

「ただいまー。」

「あら～おかえりなさいウィル、パパを起こしてきてくれない？朝ごはんにしましょう～。」

そう言われて俺は寝室へ向かう。
そこにはもう年齢はおっさんなのに青年にしか見えない男が一人。
ありえない寝相で幸せそうな顔をして寝ている。

「父さん、朝ごはんの時間だよ、起きて。」

「う～ん…あいつに報酬を渡すまえに脱出するわけには…」

訳のわからない寝言を言って一向に起きる気配がない。
大きな声を出しても揺すっても全く起きない、
はぁ…仕方ない、あの方法で行くか。

「あ！あそこにまだ見ぬお宝「どこだ！」あ、起きた。」
ガバァッ！と今まで爆睡していたにも関わらず勢い良く跳ね起きる。
「父さんおはよう、もうごはんの時間だから、母さんも待ってるよ。」
あ、あれ…？お宝は…？あいつは…？と寝ぼけている父さんをおいて居間に向かう。
食卓にはすでにトースト、サラダ、スープなどの色とりどりの朝食が用意してあった。
母さんはすでに椅子に座って待っていて、あとは父さんが来るのを待つだけだ。
それにしても母さんも年齢的には父さんと同じはずなのに見た目は少女そのもの、
街で姉弟に間違われたこともある、我が両親ながら一体この二人は何者なんだろうか？
「どうしたの～？ぼーっとして？」
い、いや、なんでもないよと席に着く。心を読まれたら困るからな。
この前うっかり口が滑って年齢の話をしたらすごい笑顔で「体にいいのよ～」
と苦さが限界突破したスープを飲まされた時は心から後悔した。
少しして父さんも席につき、３人で手をあわせて唱和する。
「いただきます。」

なんでも父さんが以前東の国に旅をした時そこでの風習であったそうで、
命をいただく際の礼儀、ということで我が家でも行なっている。

「今日もレイの飯はうまいな！一日の活力だ！」

「うふふ～、そう言ってもらえると作りがいがあるわ～。」

と、いただきますと礼儀よくはじめた割にはすごい勢いで朝食を平らげる父と、
それをにこにこと嬉しそうに見つめながら食べる母、マイペースで食す自分。
結婚してからもう１０年以上経つのにこの二人、未だにラブラブである。
食事が終了すると再び手をあわせて唱和する。

「ごちそうさまでした。」

これも東の国の風習で、感謝の気持ちを表すそうだ。
食器を片付けていると父さんが「準備ができたら外にこいよ。」と言って出ていく。

少しは自分で片付けなよと思いながらも父さんの分も片付け、
母さんに行ってきますといって外に出ていく。
これがいつもの我が家の朝のである。

第二話（後書き）

とりあえず日常。

第三話（前書き）

ちょっとシリアス？

第三話

この世界には「加護」といわれるものがある。
なんでも生まれながらにして神から授かる力らしく、
その力によって身体能力の強化、呪文と呼ばれる奇跡を使うことができる。

「加護」は魔物と戦うことでのみ経験をつむことができ、
一定の経験をつむことで「加護」の力が強まり、より強い力を得ることができる。

しかしながらこの「加護」は全てのものに等しく…なんてことはなく、しっかりと個体差があるのである。それを昔々にどこぞの学者が発見し、「加護」の強さを最大Ｌｖという概念で設定した。

そしてそれは「加護」の強さがその人間の強さの素質であるという風習を定着させた。
産まれたときに最大Ｌｖを測定し、その子が戦うことが出来るかを見極められるのである。
もちろん加護の力がなくても日常生活を送るのになんら不便はない、あくまで魔物と戦うための超人的な力を手に入れるための手段なのである。

一般的な人が高くてＬｖ５０、素質の高い人で最大Ｌｖ７０～８０前後。
最大Ｌｖが９０を超える人はほとんどおらず、いわゆる「英雄」の資質を持つ人達である。

そんな中今も世界的に有名な冒険家である父ロック。
元魔法使いにして各方面に音に聞こえた研究者であった母レイ。
最大Ｌｖ９６と最大Ｌｖ８８の間に生まれた息子である俺ウィルは
周囲の期待も大きかったらしい。
国王の前での最大Ｌｖ測定には多くの人々が注目していた。
しかし結果は思わず国王でさえ絶句してしまうものとなってしまう。

「Ｌｖ…２０…？」

誰ともなくそうつぶやいた、そう、俺は「加護」の力が極端に弱かったのである。
低い人でもＬｖ４０はあっていいはずの「加護」が今までにない低さだったのだ。

当然のごとく周りからは「かわいそうに…」とか「残念でしたな…」との声が上がり、
国王からも「あまり気にやまないように」と慰めの言葉が出た。
しかし父ロックは大声で言い放った。

「別にあんたたちの慰めの言葉も同情の言葉もいらない！どんなことがあろうともこの子は俺たちの子供に変わりはなく、そこに「加護」の力は関係ない！」

母レイがそれに続く。

「そうですよ～、ウィルは私達の息子、それは神にすら変えられない。それに「加護」の力が全てではないですからね～。」

二人にそう言われた人達は何も言い返すことが出来ず、帰っていく夫婦を見送った。
しかしこの測定は多数の人に見られていた為にすぐに話が広まることになった。

「ロックとレイの息子ウィルは最大Ｌｖが２０しかない」

そのせいか昔から俺は周囲の子供たちにはいじめられ、大人達からは同情の視線を向けられて生活することになった。お使いで街に出れば、

「やーい、お前弱いんだってなー！」「（ヒソヒソ…）ご両親はあんなに立派なのにねぇ。」

と罵詈雑言のオンパレード、当然友達など出来ず一人でいることが多かった。
偉大な両親に不釣り合いな自分、どうして自分はこんなに弱いんだろう？なんで自分はこんな思いをしなければならないんだろう？そんな葛藤を感じていた時に言われた一言。

「お前本当はあの二人の子供じゃないんじゃねーのか！」

当時の俺にはその言葉が心に強く突き刺さった。そんなことはない、と自分に言い聞かせながらもじわじわと広がっていく不安。
でも自分はこんなに弱いし、もしかしたらそうなのかも…
不安が疑念を呼び、とうとう両親に聞いてしまった。

「ねぇ？本当に僕はお父さんとお母さんの息子なの？もし違うのなら正直に…」

とまで言ったところで頬に強い衝撃を感じると共に自分が吹き飛んでいることに気づく。
どうやら父さんに殴られ、壁に体を打ち付けたようで、鈍い痛みを感じながら薄れゆく視界の先に怒った顔の父と涙目の母を捉えながら意識を失った。
どれだけの時間が経ったのかはわからないが、目を覚ました時まず目に入ったのが母さんの顔だった、どうやら膝枕されていたらしい。

「やっと目を覚ましたわね～、パパのはやりすぎだとは思うけどそれも仕方ないこと、それだけ怒っていたってことよ～。」

あんなことを言ってしまった後だ、今更どんな顔をしていいかわからず思わず母さんから目をそらす。ふと部屋の隅に目をやると正座して首から“反省中”の札をぶら下げている父さんがいた。
どうやら母さんからお仕置きされているらしい、と思っていると急にぎゅっと抱きしめられた。

「ウィル…周りがなんと言おうともあなたは私達の息子、それだけは疑わないで、そんな悲しい事を私たちに言わせないで…」

ふるえる声で俺を抱きしめながらそう言う母さん。
父さんも俺の目を見ながら言った。

「母さんの言うとおりだ！周りの目なんか気にするな！たとえ世界が敵に回ったってお前を、お前たちを守ってみせる！」

そんな父さんに、正座してなければかっこいいのにと思いながらも、父と母の言葉に、嬉しさがこみ上げ、次に両親を少しでも疑ってしまった自分が恥ずかしく大声で泣きながら謝った。

そしてこの二人にの間に生まれたことを誇りに思った。
どんなことがあっても二人は自分の味方でいてくれる、そう思うだけで強くなれる気がした。

それからは何か言われても気にならなくなった、自分の中に揺るがないものがあるから。
そうなると周りは興味を失うのか次第にいじめなどもなくなっていった、友達は相変わらずいなかったが。

その頃から俺は父さんに戦い方を習うことにした、Ｌｖだけが強さではないということを自分の力で証明したかったのだ。
もちろん父さんは二つ返事で了承、パパだけずるい！と母さんからも炊事洗濯や
研究者であった時に培った知識、技術などを教えてもらうことになった。

そういえばその生活になれはじめた時だったな、あいつと出会ったのは…

第三話（後書き）

次回勇者が出ます。

第四話（前書き）

まだちょっとシリアス？

第四話

それは両親から様々な技術を習っているある日のことだった。
父さんは戦闘もこなすが、基本的にはとうぞく（本人はトレジャーハンターと言い切っている）なので、
どちらかと言えば宝を探したり、敵から物をかすめ取る方が得意である。

ちなみにとうぞくが「加護」によって覚えることのできる呪文はフローミとレミラーマの２種類である。
フローミは自分の現在地の名称と階層を知ることができる呪文。
レミラーマは周囲に落ちている宝を発見することができる呪文である。

ぶっちゃけ戦闘には全く役に立たないがフローミは地図と併用すれば迷子になりづらくなるし、レミラーマは小銭を拾い集めたりするのに役立つそうだ。

そんなことを自慢気に話す父さん、なんというか…有名な冒険家なのにみみっちいぞ。
しかも迷子って…そういえばこの前北は上、南は下とか言ってたような気がする、うん、忘れよう。

母さんいわくレミラーマはＬｖ２０で覚えられるので限界まで鍛えれば俺でも覚えられるそうだ。
ただしかしこさによって前後するため勉強は欠かさないほうがいいと言われている。
父さんはＬｖ２３で覚えたと言っていたがもしかしなくても父さんはバカなのか？

なんてことをうっかり口走ってしまったのが運の尽き、いい笑顔の父さんに、

「今日はこの花を探してきてもらおうかな！」

と図鑑で初めて見る花を探してくるよう言われた。
どこに咲いているかなどは全く教えてくれず、漠然とこの近辺にあるとしか言ってくれなかった。
かしこいウィルなら俺の力なんぞなくても探し当てるだろう！
と完全に根に持っているようである。みみっちい…。
まぁここらにあるならそんなに苦労しなくても見つけられるだろう、と探索に向かった。

「完全に甘く見ていた…」

外はすでに夕暮れ時、朝一番で出かけた俺は自分の見通しの甘さを嘆いていた。
花は確かにそこまで遠くない場所にあり、昼前には見つけることができた。
ただ咲いていた場所が問題だった。

「まさか崖の中腹にあるとは」

そう、そこまで断崖ではないが崖の途中にひっそりと咲いていたのだ。
もちろん上から飛び降りて見事着地！なんて訳にはいかない。

うっかり失敗すれば怪我だってするし下手すれば命が危ない。
どんな高いところから落ちてもドシャア！という音のみで無傷なのは狩人さんだけだ。
あの人達はきっと特殊な訓練を受けているんだ。

仕方なく父さんからもらったばかりのロープを近くの木に括りつけゆっくり降りていく、
そうなることを見越してロープを渡したに違いない、後で母さんに報告しよう。
花が咲いているのは2本しかなかったため、それらを懐に入れ、傷つけないようロープを登る。

そのせいで思った以上に時間がかかってしまったわけである。今は家路を急いでいる。
ふとその途中通りがかった川辺で一人の子供が佇んでいるのを見つけた。
別に無視しても良かったのだが、こんな時間に一人は危ないし、何故か声をかけなければという気になった。

「ねえ、君、どうしたの？」

声をかけるとその子は一瞬ビクッとなったあとこっちを見て、笑顔で言った。

「ちょっと考え事をしてただけだよ！そういう君は？」

「俺は父さんに頼まれたものを取りに行ってたんだ。」

お父さんの…そうなんだ…と複雑そうな顔でその子は呟く、気まずく思ったのか

君の名前は？と聞いてきたのでウィルだよと言っておいた、こちらが聞き返すと

「え？ボクのことを知らないの？オルテガの息子のボクを？」

なんかいきなりホントに知らないの？みたいな顔をされたのでちょっとむっときた俺は

「そもそもオルテガが誰かも俺は知らないよ、というかそんな可愛い顔してるから女の子かと思ってた。」

意趣返しのつもりで言い返してやった、というか女の子と思ってたのは事実だ。

身長は俺より少し低めで中性的な顔立ち、つややかな黒髪を長めにのばしている、うんやっぱどう見ても女だ。

「かわいいって…！違うよ！ボクはれっきとした男だよ！」

頬をうっすら赤くしながらぷぅっとふくらませて言うな、いよいよ女にしか見えない。

「それよりも君の名前を教えてよ、オルテガとかいう人とは関係なく俺は君の名前を知りたいんだ。」

そういうとその子は大きく目を見開いた後、次第にうっすらと目に涙を溜めながら…ってなんで泣く！？

「ボクは…ぐすっ…ボクの名前はアリスト…ひっく。」

それから泣いているアリストを慰めながら彼の話を聞いていた。

なんでも彼の父はオルテガといってアリアハン屈指の戦士だったらしい。
最大Ｌｖは９７、うちの父さんよりも高かったらしく、宮廷内にも相手になるものはいなかったそうだ。
そんな折、魔物たちの動きが活性化した時期があり、原因の解決のためオルテガは一人で調査に向かった。
そして火山で魔物と戦い帰らぬ人となったらしい。らしいというのはあくまで噂だからである。

父がダメならその息子と目を付けられたのがアリストらしく、小さい頃から「オルテガの息子」という肩書きで育ってきた。母、祖父からも「あの人の息子、孫」とまるで自分は父の代替品のような扱いを受けていたらしい。
偉大なる英雄の息子として、表面上は立派な「息子」としての自分を演じてきたが、その内はかなり寂しかったらしい。

そこにいきなりポンと現れた俺が「父とは関係なく君のことを知りたい」と言ったことで心の抑えが壊れたのだろう。
何度も急に泣いたりしてごめんねと謝ってきていた。
でも俺はその時全く別のことを考えていた。

…そうか、こいつは俺と同じなんだ。

俺の場合は両親がいたから孤独を感じても自分を壊さずにすんだ、
でもアリストは…？
親にすら自分を見てもらえず、今までそれを誰にも悟られないよう生きてきた。

それは想像以上につらいことであり、少なくとも子供がするべきことではない。
だから俺は、アリストを抱きしめながら言った。

「もう泣かないで、君が寂しくなくなるまで一緒にいてあげるから。」

少しでも寂しさがなくなるように、自分と同じ思いをさせないために心を込めてそう告げる。
すると今まで泣いていたアリストの涙がぴたっと止まり、顔が赤くなっていた、
きっと泣きはらした後だからだろう。とりあえず泣き止んだなら大丈夫だと思い体を離す。

「これからは俺と友だちになろう、オルテガの息子じゃない、ひとりのアリストとして、そうだ、さっき採ってきた花、これあげるよ、友達の印だ。」

するとアリストはえっ？この花って…と戸惑いながらもこちらを見ながら花の咲くような笑顔で言った。

「うん！これからよろしくね！ウィル！」

時間もすっかり夜になってしまったのでとりあえずアリストと別れた、また明日ね！と言って。
実は俺にとっても初めての友達だったため内心かなり嬉しかったりしていた。

ウキウキ気分で家に帰るとそこには鬼が待っていた。

「あらら～ウィル～随分楽しそうね～、何して遊んでたのかしら～？」

いつもより口調が間延びしている母さんは確実に怒っている、経験がそう告げている。

というか後ろに禍々しいオーラをまとっている、ぶっちゃけチビリそうだ。

こうなったら覚悟を決めるしかないと今日手に入れた花を前に出しながら、

「ごめんなさい！どうしてもこれを母さんにプレゼントしたくて！」

と言った。もうどうにでもなれ！

すると感じていた威圧感が薄れ、恐る恐る顔を上げると、そこには満面の笑みの母さんが。

「私がこの花大好きなの知ってたの～？嬉しいわ～。」

なんとか俺は今日も生き残れそうである。

「でもいくら母さんのためとはいえあんまり危ないことしちゃダメよ～。さ～て、パパ～？確かこの花って崖に咲いてたわよね～？なんでウィルが持ってくるのかしら～？え？ウィルが勝手に行ったって？じゃあウィルの持ってるパパのロープはなんなのかしら～？ウィル？そのロープ貸してくれない？じゃあパパ行きましょうか～、え、どこに？うふふ～。」

そう言って母さんに連れて行かれる父さん、俺は何も見ていない。

今日は色々と疲れたし、早く寝て明日に備えよう！

第四話（後書き）

狩人さんは架空の存在です。

第五話（前書き）

まだシリアス気味かも…

第五話

ボクの名前はアリスト、偉大なる英雄「オルテガ」の息子だ。
小さい時からそうだった、どこに言っても誰と話しても必ず、

「オルテガの息子」

というフレーズがついてくる。
お母さんやおじいちゃんでさえも

「あの人の息子、あいつの息子でわしの孫」

と日に何度も言い聞かせるようにボクに言ってくる。
でもボクの名前は呼んでくれない、最後に名前を呼んでくれたのはいつだろう？

ボクにはあまりお父さんの記憶というのがない、小さい時にいなくなってしまったから。
正直に言うとパンツ一丁にマントのむさくるしいおっさんぐらいの印象しかない。
だって会話もほとんどしたことがないから。

一度だけお父さんと一緒に街に出かけたことがある、断片的にしか思い出せないけれど。
その時も覚えているのは周りの人達がボクを「オルテガの息子」としか見ていなかったこと。
ただお父さんの顔がずっとバツの悪そうな表情だったのだけは今も忘れられない。
そして帰り道にボクを抱き上げていった言葉。

「お前は…ワシの息子だ、…その前に…であることを忘れるな、例え…なんと…とも。」

あの時お父さんはなんて言ったんだろう？あの時は早く帰りたくてほとんど聞いていなかった気がする。そのすぐ後にお父さんは魔物退治に行って、そのまま帰って来なかった。
本当はいけないことだってわかっているんだけどボクはその時確かに

「嬉しい」と思ってしまったんだ。

だってこれでもうお父さんと比べられることはないと思ったから、ボクはアリストとして生きていけると思ったから。でも現実は違った。

国はお父さんのかわりにボクに白羽の矢を立てた、父のカタキは息子が取るべきだとして。
それからは周囲の目が本格的に「オルテガの息子」としてボクを見るようになった。でもそれをボクは受け入れた、きっとこれはお父さんがいなくなってもいいと思った罰なんだと。
だからこれからはお父さんの息子として生きていかなければならないんだと。

でもやっぱり寂しい、その気持ちは変わらない。
寂しさを紛らわせるためによくボクは一人で川辺に佇むことが多くなった。
一人なら誰にも気を使う必要がないから。
でもそんな時だった、彼が現れたのは。

その日もいつものように川を見ながらぼーっとしていた。
ここは滅多に人が来ないからお気に入りの場所だ、ったんだけど…

「ねえ、君、どうしたの？」

急に声をかけられてびっくりする、本当は今人と話したくなかったんだけど、
ボクはオルテガの息子、無視なんてしようものなら周りから何と言われてしまうかわからない、だからいつもの様に作り笑顔で

「ちょっと考え事をしてただけだよ！そういう君は？」

この時はなんで会話を続けようと思ったかは自分でもわからない、
結果的にそれがいい方向に向かったんだけど。

「俺は父さんに頼まれたものを取りに行ってたんだ。」

その言葉を聞いて思わず顔をしかめてしまう。
こんな時間まで父親に頼まれたことに縛られるなんて、
彼も父のことで苦労してるのかなと今思えば的はずれなことを考えていた。

流れを変えるために名前を聞いたらウィルと答えてくれた。
逆にボクの名前を聞いてきたので思わず焦ってしまい

「え？ボクのことを知らないの？オルテガの息子のボクを？」

と言ってしまった、確かにボクの名前を知っている人は少ないかもしれない、ほとんど聞かれたことがないから、でもみんなボクのことは知ってると思っていた。
すると彼はちょっとむっとした様子で

「そもそもオルテガが誰かも俺は知らないよ、というかそんな可愛い顔してるから女の子かと思ってた。」

えぇ！？ここに住んでてお父さんを知らないの！？
というかボクが女の子って、えぇ！？
色々と驚きすぎて気が動転していたボクは

「かわいいって…！違うよ！ボクはれっきとした男だよ！」

と演技するのも忘れて素の感情を出してしまった。
でもそんなことを気にするでもなく彼は言った。

「それよりも君の名前を教えてよ、オルテガとかいう人とは関係なく俺は君の名前を知りたいんだ。」

その言葉を聞いて世界が一瞬止まる、…え？今、なんて言ったの？
ボクの名前を知りたい？お父さんとは関係なく？ボク自身の名前を…？
ボクに興味を持ってくれた？ボクを知りたいと思ってくれた？
ただ一言アリストだよ、そういえばいいだけのはずなのに、頭がそれを理解したときにはもうダメだった、目頭が勝手に熱くなっていき

「ボクは…ぐすっ…ボクの名前はアリスト…ひっく。」

気づけば泣いていた。

それから感情を抑えられなくなったボクは彼に次々と話をした。
自分は偉大な戦士の息子として生まれたこと。
みんな偉大な父だけを見ていて自分を見てくれないこと。
父が帰らぬ人となってからは「立派な息子」を演じてきたこと。
ずっと寂しかったことなどを泣きながら、謝りながら。

きっと変なやつだと思ってるよね、鬱陶しいと思われてるんだろうね…
初めてボク自身に興味を持ってくれたっていうだけなのに、勝手に何でも聞いてくれると勘違いして、彼にとってはどうでもいい話をひたすら話し続けてる自分に自己嫌悪を覚えていた。
もう少ししたら元に戻るから、そうすればもうきっと君と話すこともないだろうから、ちょっとだけ我慢してね。
そう思っていたら急に彼に抱きしめられ、ささやかれた。

「もう泣かないで、君が寂しくなくなるまで一生そばにいてあげるから。」

今ボクは自分の部屋のベッドの上で寝転んでいる。
机の上には彼が去り際にくれた花、それを見ていると自然と頬が緩む。
ボクにできた初めての友達、「オルテガの息子」ではなくアリストをみてくれる本当の友達…

でもなんでだろう？友達という言葉がしっくりこない。
こんなに胸はどきどきして顔は熱くなるのに。

でもいいや、明日また会ったら考えよう。
また明日！彼・・・ウィルが言った言葉を思い出し布団に入る。
今日はよく眠れそうだ！
花瓶の中の胡蝶蘭の花だけがそんな彼を見ていた。

第五話（後書き）

ウィルのセリフが微妙に違うのはアリストの聞き間違いです。
胡蝶蘭はよくわからないけどとりあえず調べた花言葉ｗ
そして早くもストックが無いのでこれからはでき次第になります。

第六話（前書き）

第一話から第五話までも見やすくなればとちょっと変えたりしてるので良ければそちらもご覧ください。

第六話

今日も朝から日課となっている走り込み。
ただ今までとは変わった部分がある。

「おはよう！ウィル！」

「おはよう、アリスト。」

アリストが参加するようになったのである。
あれから俺たちは一緒に遊ぶようになり、お互いを知ることになった。

もちろん俺が最大Ｌｖ２０までしか上がらないことも伝え、
それでも強くなれることを証明するため努力していると伝えると、
何やら考えはじめていたようだが、ある日。

「ボクも参加してもいいかな？」

と聞いてきた。
俺としては一人よりもよっぽど楽しいし、
願っても無いことなので了承したが、なんでまたと理由を聞いてみると。

「ウィルのことをもっと知りたいし、守ってあげたいから。」

と嬉しさ半分、複雑さ半分の回答が帰ってきた。
俺に興味を持ってくれるのは嬉しいのだけれども、
やはり面と向かって弱いと言われているような気がするし、

同じ男として守ってもらうのにはプライドがあるわけだ。
まぁそこは俺が守ってもらう必要がないくらいに強くなればいい、
ということで自己完結した。

ちなみにこのアリストさん、「加護」による最大Ｌｖを
聞いてみたところ、なんと最大Ｌｖ？？？らしい。
ということは魔物と戦えば戦うほど強くなる？限界がない？
こいつはもしかして「勇者」なんじゃないだろうか？
なんて反則キャラなんだとさすがに嫉妬を覚えたが、アリスト自身
はいいやつだし、特にその力で増長するようなこともしない、むし
ろ、こんな強い力があることに嫌気がさしていたようだ。
それにこればっかりは生まれつきなんだから責めるわけにもいかな
い。
悪いのは全部「加護」だ、うん。俺神様のこと嫌いになりそう。

現時点では魔物との戦闘なんてしていないため特に差はない、
むしろ先に訓練をはじめていた俺のほうがちょっと上なくらいだ。

走りこみを終えると家に一旦帰る、もちろんアリストと一緒だ。
最近は食事もうちでとっていくことが多い。
初めてうちに来た時自分の家はいいのかと聞いたところ、

「鍛錬で出かけるって言えば、さすがはあの人の息子だ、で納得し
てくれるから。」

と少しだけ寂しそうな笑顔で言った。
なのでそれ以上は問わず、好きなだけ食べていけばいいとだけ言っ
ておいた。
最初は両親を多少警戒していたアリストだったが、

「お、初めて見る顔だな！とうとうウィルにも友達ができたか！レイ！今日はめでたい日だ、セキハンを炊くんだ！」

「あらあら～、いらっしゃい、ゆっくりしていってね～、セキハンはないけど腕によりをかけるわね～。」

と、想像以上の歓迎ムードに逆に一瞬引いてしまったらしいが、すぐに打ち解けていた。

てかセキハンて何さ？と聞いたらなんでも東の国でめでたいことがあった時に作る真っ赤な料理らしい、うまいのかが全くわからん。

それにしても父さん東の国好きだなー。

「いただきます。」

合わせる手の数が４つになった食卓で今日も朝食がはじまる。

本日のメニューはトースト、サラダにくろこしょうと呼ばれるピリッとした風味の香辛料がふんだんに使われたベーコンエッグ。

余談だが我が家では割と普通に使われていたこれが、後に国の王が欲しがるほどの貴重品だと知ったときは本気で驚いたものである。

相変わらずすごい勢いで平らげる父とそれをにこにこ嬉しそうに見つめる母。

マイペースに食べる俺、全くもっていつもの光景に今はアリストが加わる。

はじめはくろこしょうの独特の刺激に驚いていたが、気に入ったのか今はくろこしょうだけつまんで風味を楽しんでいるようだ。

あ、アリスト、そこのジャムとってー。

「はいどうぞ、ウィル。」

ありがとー、やっぱ食事は大勢のほうが楽しいな。

「そうだね、ボクこんなに食事が楽しいなんて感じたこと今までなかったよ。あ、ウィル、口の横汚れてるよ？」

「あらあら甲斐甲斐しいわね～きっとアリストちゃんはいいお嫁さんになれるわよ～。」

と口の横どころか鼻の頭まで汚れてる父さんの顔を拭きながら言う母さん、父さん…犬かよ…。

そして母さん、前提が間違ってるから、アリストは男だから。

出会って速攻女と勘違いした俺が言えたセリフじゃないけど。

ほら、アリストもなんか言ってやれよ。

「え！？そ、そんな照れちゃいますよ…それにボクはまだウィルとは…」

照れるなよ、お前自分が女だって言われてるんだぞ？俺の時は怒ったじゃないか。

後最後のほう聞き取れなかったんだけどなんて言ったの？

「な、なんでもないよ！ほら、さっさと食べちゃおう！」

とがっつき出すアリスト、それを見ながらにこーと微笑む母、

そして早くも外に向かっている父、意味がわからん。

あと父さん、食器いい加減片付けようよ…

ｓｉｄｅ　レイ
うふふ～、アリストちゃんのウィルを見る目つき、アレは完全に恋する乙女の目ね～。
さすがのロックも気づいたみたいだし～、肝心のウィルは全くわかってなかったみたいだけど。
はぁ～、あの子も父親似で罪作りな子になりそうね～。
それにしてもアリストちゃんは男の子のはずなのになんでか大丈夫だって思っちゃったのよね～。
これはもう女の勘！てやつかしら～。

まあいざとなったら本当の家族になっちゃえばいいだけだし、
ロックを説得する準備をしておかないとね～。
楽しくなってきたわ～、うふふ～。

ｓｉｄｅ　ロック
うーん、アリストはどうやらウィルを異性として見ているみたいだな。
思わず言ってしまいそうになったがレイからオーラを感じて思わず逃げてしまった。

それにしても性別の問題はどうするつもりなんだ？
家族として迎えるのは構わんがさすがに嫁にするのはどうかと思うぞ？

まあとりあえずはウィルも気づいていないみたいだし今は置いておくか。

そろそろ冒険の虫がうずきだしてきたなー。

第六話（後書き）

まだまだ冒険に出る気配がない…
しばらくは日常での内容が続くと思います。
冒険を期待されている方には申し訳ないですがもう少しお待ちください。

第七話（前書き）

今までで最長、というか完全に説明回です。

第七話

以前「加護」の力によって呪文が使えるようになることは説明したと思う。
これは魔物を倒し経験を積み、Ｌｖが一定の値に達した時、自然と頭の中に使い方が浮かび上がってくるのだそうだ。

だからといってレベルが上がるたびにポンポンと呪文を覚えるわけではない。
村人Ａがレベル９９になった所で、畑仕事には役立つかもしれないが所詮は村人、そこまで強くはならないし呪文も覚えない。

では呪文を覚えるにはどうすればいいか、それは教会での特殊な契約が必要となるのである。
１６歳になった時を起点に、以後は好きなタイミングで「しょくぎょう」を選択することができる。
その選択したしょくぎょう、つまりは契約の内容によって神からの「加護」の形が変わる。

呪文は覚えないが肉体の強化が一番強力で、重装備によるパーティの壁となる「せんし」。
せんしよりも攻撃的な強化がされ、特に徒手空拳による戦闘を得意とする「ぶとうか」。
肉体の強化は弱いものの、数多くの呪文による戦闘を行える「まほうつかい」。
神の奇跡の力を最も強く受け、癒しの呪文による補助を長所とする「そうりょ」。
魔物から多くのゴールドを見つけたり、よりよい商品を見抜く目利きが特徴の「しょうにん」。

すばやさによるアイテム奪取や、旅をする上でのさまざまな補助が可能な「とうぞく」。
強化はほぼないが、行動を起こすたびに別の意味で神が降りやすくなる「あそびにん」。
大きく分けてこの７種類である。

冒険者を目指すものは必ず一度は教会に行き、神の前にて自分の進む道を選ぶ、そこで契約することによって「加護」の力を強くするのである。

契約といっても難しいものではなく、神父の前で宣言し、それを受け取った神父が宣言したものにありがたいお言葉を与え、一枚の紙切れを渡すことで契約が完了する。

この紙切れ、常に所有者のＬｖを示すものであり、魔物との戦いによってＬｖが上がると書かれている数字が変わるので、自分の「加護」が今どのくらいの強さになっているのかがわかるという仕組みだ。

これは（俺の中ではすでに敵として認識されている）Ｌｖの概念を見つけた学者が作ったものらしい、本来なら神父の言葉で契約は完了なのだが、Ｌｖを知ることができるのは便利なことなので渡すのが慣習化したようだ。紛失すると再配布には１０Ｇかかる、神が直接関与していないものとはいえ教会の方々も人の子ということだ。

少し話がそれてしまったが、しょくぎょうを選ぶ上で一番気を付けなければいけないのは、一度選択したものを変えることはできない、ということである。

せんしにしたけどやっぱり呪文を使いたいからまほうつかいになる

！という訳にはいかない。

昔酔っ払ったおっさんが、「３０歳を越えた独身男性は皆まほうつかいになる。」と涙ながらに言っていたのを聞いたことがあるが、ただの迷信らしい。ずっとせんしのままだった。

安易に選んでしまう人も少なくないようで、結果的に自分の思っていたものと違い、こんなはずではなかった…と戦うことを諦めてしまう人もいるそうだ、なので慎重に考えたほうがいいと母さんに言われた。

ちなみに父さんの話によると、世界のとある場所にはダーマという神殿があり、そこではしょくぎょうを変えることができるそうなのだが、しょくぎょうを変えるとＬｖが強制的に１に戻されてしまう上に、神殿の場所も結構人の寄り付かないところにあるらしく、現実的な方法ではないらしい。そしてなによりも、

「中途半端でやめるくらいなら最初から選ぶなと俺は言いたい！」

父さんはダーマ神殿否定派であるらしい。

俺は父さんと同じとうぞくになるつもりである。理由としては戦い方が同じな方が学びやすいと思ったのもあるが、実のところ消去法だったりする。

まほうつかいは俺では全ての魔法を覚えられないから断念、そうりょも同じ理由、何より俺は神にいい印象がない。

あそびにんは論外、なろうものなら母さんが泣く、しょうにんは別に商売がしたいわけではないので却下。

せんしとぶとうかは迷ったのだが、せんしは速さ不足、ぶとうかは装備の軽さなどから選択肢より消えることとなり、一番安定していそうなとうぞくを選んだのである。

それは安易な選び方ではないのかと突っ込まれそうだが、自分なりにじっくり考えた末の決定なので問題はない。

さて、呪文は確かに便利であり、強力な手段ではあるが万能ではない。

無限に使用できるわけではないし、ある程度強くならいと呪文も覚えていかない。

肉体の強化も弱く、使える呪文も少ない。

まほうつかいになった人達が一番初めにぶつかる壁がそれだそうである。

そこで呪文の力を過信しすぎるのは危険だという考えが広まり、人間は「加護」をもっと有効活用できないかと試行錯誤を重ねた。

そして作り上げたのが「特技」である。

その特徴は「加護」を部分的に強化し、特殊な力を引き出すというところにある。

例えば、現在とうぞくにとって必須スキルと言われているものの中にタカのめ、とうぞくのはな、しのびあしがある。

タカのめは、視力強化により近くにある建造物を探し当てる特技。
とうぞくのはなは嗅覚の強化をし、周囲の宝を察知する特技。
しのびあしは、足元に「加護」の力をまとい、足音を消すことによって魔物に気づかれにくくなる特技。

特技と呪文の大きな違いは、特技は努力さえすれば誰でも覚えられるところである。

盗賊の必須スキル３つも、頑張れば他の職業でも習得可能なのである。
しかも習得にＬｖが関係しない、使えるようになるかは本人次第で、Ｌｖが上がり「加護」が強くなれば威力も一緒に上がっていく、といったところである。

もちろん適正、というか覚えやすさはあり、タカのめなんかは同じく目がよいしょうにんは覚えやすいが、そうりょあたりは覚えづらいそうだ。

更に世界には、強い「加護」の力を利用したり、複数の特技を組み合わせた奥義を使う人達もいると聞いたことがある。これは基本的に開発した者オリジナルの技になることが多い。

というのもほとんどの人が使い方を秘匿してしまうため、後に伝わらず消えてしまうからだ。確かにせっかく開発した自分だけの技を他の人にも使われてしまうのは悔しいかもしれない。

さっきは奥義について聞いたことがある、と言ったが、実は父さんと母さんも奥義持ちだったりする。

父さんは「盗む」を昇華させた「ぶんどる」。

これはとうぞくのはなを魔物に使い宝を持っている相手を特定し、タカのめにより宝の位置、魔物の弱点を探し出し、速攻で相手に致命傷を与えつつものを盗む、というもので、父さんいわく「別に誰でも使える」ということなので秘匿はされていないのだが、戦闘中瞬時にその判断を行えるものはおらず、結果オリジナルの奥義のような扱いになっている。

母さんは自らが開発した「燃える水」と呼ばれる液体が入った小瓶を敵に投げつけ、メラによって発火、爆発させる「ボム」を使う。

当初本人は、「四肢粉砕灼熱爆発地獄火炎瓶」という名前を付けたそうなのだが、周りの強い反対により変更したらしい。周りの人達の苦労がうかがい知れる。

もちろんボムもオリジナルになっている、燃える水の製造技術は母さんしか知らないし、投げた小瓶にメラを当てる技術など難易度が高すぎるのである。

二人からそれぞれ奥義を教えると言われていた、だがとうぞくはメラが使えない、なのでボムは断ったのだが、

「え～、いっつもパパばっかりずる～い！いいもん、私はアリストちゃんに教えるから～！」

とアリスト強化計画を発動してしまった。

アリストはしょくぎょうとしてはまほうつかいになりたいそうなの

だが、Ｌｖが際限なく上がるならそれを活かしてみればどうだと母さんに言われ、剣士としても戦闘を行えるいわゆる魔法剣士を目指すそうだ。

近接においては剣による戦闘、遠距離においては呪文を使った攻撃、中距離ではボムを雨あられのように降らせ魔物を殲滅するアリスト…想像すればするほど、俺アリストと友達でよかったと思う。

「…ふぅ」

今まで読んでいた本を閉じ、一息つく。あれ？なんかこの始まり方デジャヴ？

本の表紙を見ると「腐った死体も3日でわかる！初歩の呪文・特技　レイ著」と書いてある。

母さんはネーミングセンスがないのか？確かにわかりやすかったけども。

ここは俺の部屋、本日は勉強の日で、戦う技術は必要だけれども知識がないと応用が効かないということで行なっている。

母さんが書いた本は題名はともかく中身はしっかりしているので読んでおいたほうがいいとは父さんの談。

肝心の本人は直感が服着て歩いているようん人間なので勉強は全くしなかったらしいが。

ふと横に目をやると机に顔を突っ伏したまま夢の世界に旅立っているアリストを見つける。

「んにゅ～…えへへ、ウィル～…」

よだれを垂らしながら幸せそうな顔をして眠りこけるアリスト、こいつ実はかなり勉強が苦手である。表紙でまばたきの回数が増え、目次で目がトロンとなり、数ページ読み進めるまもなく意識を失ってしまう。

未来の魔法戦士がそれでいいのか？てか俺は夢のなかでどうなっているんだ。

そんなことを考えていると扉が開かれ、母さんが入ってきた。

「お茶入れてきたから休憩にしなさい～、って片方はすっかりお休みみたいね～。…アリストちゃん？」

と言われると急にビクン！と反応し、起き上がるアリスト。

「ん～…、あれ？ここはどこ…？」

どうやらまだ寝ぼけているようである、体だけが反応するとは、いったい二人の間に何があったんだ。

「あれ？ウィル？ここどこ？確かさっき二人で教会に行ってたはずなんだけど…。」

「まだ寝ぼけてるのか？ずっと俺の部屋で勉強してたじゃないか、主に俺一人が。」

なんだ早くもしょくぎょう選ぶ夢でも見てたのか？と聞くとえ？あ、うん、そうだよ！と顔を真赤にしながら言うアリスト。恥ずかしい夢だったのか？でもお前はもっと目の前の問題に早く気づくべきだと思うんだ。

「アリストちゃ～ん、寝る子は育つから寝るなとは言わないけど～、時と場所は選ばないとね～。さぁ～ちょっとこっち来ましょうか～。」

母さんを視界に入れ、いつもより間延びしたその言葉を聞くと同時に顔が真っ青になっていくアリスト。

「れ、レイさん！？いえあのこれは違うんです！話を聞いてください！え？聞くからこっちに来なさいって？い、いやそういう意味じゃなくて！ウィル！助けて！ってなにお茶飲みながら遠い目で窓の外見つめてるのさ！？お前のことは忘れない？ひ、ひどいよ！いたっ！わかりましたレイさん！行きます、行きますからお願いだから耳引っ張らないでー！」

ウィルのうらぎりものー！という声を最後に部屋を出ていく母さんとアリスト。

一応あいつはよそ様の家の子供のはずなんだが、最近扱いに容赦がないな…強く生きてくれ。

ま、もう本当の家族みたいなもんだし遠慮はなくてもいいってことか。

さて、次はなんの本を読もうかな、「あそびにんをけんじゃにする１００の方法　レイ著」、すごくどうでもいい内容っぽいけど息抜きにこれにするか、題名についてはもう気にしたら負けな気がする。

なんかすすり泣く声が向こうの部屋から聞こえてくるような気がするけどきっと空耳に違いない。

そうして俺は再び本を読みはじめるのだった。

第七話（後書き）

というわけで説明回でした。できるだけ考えましたがきっと矛盾出てくると思いますのでご了承ください。この小説では特技についてはしょくぎょう固有にはしません。主人公強化できないので。

そして日常書くのが楽しい、なぜバトルありにしてしまったのか。次回はおそらくまたレイさん無双になるきがする…。

第八話（前書き）

今回攻略サイト見ながら書きましたが、間違いありましたら指摘お願いします。

第八話

なんで…どうしてこんなことになってしまったんだ…

ここは薄暗い地下室。
周りは全て石造りの壁に囲まれ、陽の光が全く差しこまない部屋の中でロウソクのみが頼りなく揺らめいている。
殺風景な部屋の中にはほとんど物がなく、壁にはロープが数本括りつけてあり、不気味な印象を醸し出している。
そして今俺はこの部屋の中で起こった惨劇に圧倒され、体を動かすことも出来ず立ちすくんでいる。

床には俺の父だったもの、そして親友だったものが横たわっている。
父ロック、友アリスト。
二人とも少し前までは元気な姿でいつもの生活を過ごしていたはずだったのだが、いまや父は体中をビクンビクンと痙攣させながら白目をむき泡を吹いている。
友はうつぶせの体制のままピクリとも動かない、息はしているのでなんとか命はつないでいるようだが。

この地下室には扉が一つしかない、まるで入り込んだものを決して逃さないと言わんばかりに。
そしてその扉の前にじごくのもんばんのごとく立ちふさがる黒い影。

「うふふ～、さあ後はウィル、あなただけよ～。」

我が母、レイがその手にロープを持ち微笑を浮かべながら立っている。

本当にどうしてこんなことになってしまったんだろう…

時は少し遡る、俺とアリストはいつものように部屋で勉強をしていたのだが、急に母さんが。

「ちょっと二人ともこっちに来てくれないかしら～。」

といつもの調子で呼んだので、居間に行くと、こっちこっち～、と俺達を押す形である部屋の前まで連れていった。
そこは家にある地下室の前、ここは昔母さんから立ち入り禁止令が出ていたため俺は今まで入ったことはなかったのだが、アリストは知っていたらしく。

「ヒィッ！？こ、ここは！？今度は何をするつもりなんですか！ボクまじめに勉強してましたよ！？」

とものすごい拒絶反応を示していたことからおそらくここはお仕置き部屋なのだろう。
というかなぜ今回は俺まで？別にいい子であったとは言わないが特に悪いことをした記憶もないんだが…

だがアリストほどではないがこの部屋は危険な気がする、入ってはいけないと俺の中の本能が告げている。

正直逃げ出したかったのだが、母さんに押される形でここまで来たので後ろに母さんとアリストがいる、つまり動くに動けない。
どうしたものかと悩んでいると背中を押され、部屋の中に強制的に入室させられた。

バランスを崩し倒れる俺、そしてその上にかぶさるように同じく倒れるアリスト。

「いたた…、大丈夫、ウィル？」

「ああ、大丈夫だから俺の上からどいてくれ。」

「あ、ごめんね、すぐよけるねって…上？あれ？この体制…もしかしてボク今ウィルの上で…」

急にぼそぼそとなにか言いながらうつむくアリスト、いいから早くどいてくれ。

立ち上がり初めて入った地下室の中を見回すと気になるものを２つ見つけた。
ひとつは天井からぶら下がっている「レイのぱーふぇくと呪文教室」と書かれた垂れ幕。
そしてもうひとつはその下にロープでぐるぐる巻きにされて転がっている父さんである。

全く状況が飲み込めずぽかんとしていると母さんが宣言した。

「今日は普段の勉強の成果を確かめるために試験をします～。」

時たまこうしてどれだけ学習した内容が身についているのか確認するのは気を引き締める意味でもいいことらしい。
抜き打ちになったのはたまたまさっき思いついたからだそうである。

「なるほど、それはいい考えだな。それで俺はなんでこんな所に縛られて転がされてるんだ？」

父さんが言う、確かに試験をするだけならここにいる意味はないはずだ。

「うふふ～、それは、これのためで～す。」

そう言って懐から小瓶を取り出す母さん。
中には何やら液体が入っているのだが、色がおかしい、虹色に輝いている。あんな液体この世に存在していいものなのか？
しかしそれを見た瞬間父さんとアリストの動きがピタっと止まる。

「ま、まさか…。」

「それは…。」

妙に汗をかいて焦りだす二人、それに答える母さん。

「そうで～す、先日とうとう完成した私特製ドリンク、その名も虹色七号で～す。」

小瓶の中を軽く揺すりながらにこにこと言う母さん。中の液体が揺れるたびにキラキラと光っている。

ん？七号ってことは一～六号もあったのか？

「あったわよ～、ね？パパ、アリストちゃん？」

その言葉に煤けた顔であ、ああ…、そうですね…と答える二人、どうやら聞かないほうが良かったようだ。

で？その虹色七号をどうするの？

「決まってるじゃない～、パパにはこれを飲んだらどうなるかじっけ…問題不正解者がどうなるかを見せてあげようと思って～。」

「今完全に本音が出たよな！？ていうか本音じゃなくても俺がひどい目にあうことが決定してるじゃねぇか！？」

離せ～！と体を動かし拘束から抜けだそうとしている父さん、言っちゃ悪いが芋虫みたいだ。

「無駄よ～、そのロープ意思があるから、それにパパも問題に正解すればいいだけの話しよ～。」

なるほど、父さんにも救済措置があるわけか。

というかなんだ意思のあるロープって、後で聞いたら昔錬金術にはまっていた時に作ったものらしい。本当に何者だこの人は？

「問題は全部で5問、全て呪文関係の問題で1問でも間違えたらその場で失格となりま～す。」

「よし、俺は逃げない！どこからでもかかってこい！」

おお、格好いいぞ父さん、芋虫状態でなければ。

「では第1問〜、氷結系の一番初歩の呪文の名前は〜？」

「ブリザドだ！」

……。時が止まった。

「は〜い不正解で〜す。では実験、もとい罰ゲームで〜す。」

「もう実験を否定する気すらないのかよ！？ってちょっと待て！俺間違ったのか！？あってるだろ！？や、やめろ…来るな！ぬわーーーーーーーーー！！」

まるで息子を人質に取られ身動きがとれなくなったところにメラゾーマを食らったような悲鳴を上げ倒れる父さん、いや、息子健在だけどさ。

「さ〜て次はアリストちゃんの番ね〜。」

そう言われ恐怖が身を包んだのか下を向くアリスト、しばらく何かを考えていたようだが、顔を上げると何かを決意したような顔で俺の方を向いて言った。

「ねえウィル…ボク、ここから無事に帰ることができたら君に伝えたい言葉があるんだ、聞いてくれるかな…？」

急に言われて思わず、お、おうと答え、それを聞いたアリストが母

さんの方に向き直り、お願いします！と言った。
というかアリスト、その言い回しはとても危険な香りがする。生存率がほぼ０％になりそうな意味で。

「第１問～、まほうつかいが最初に覚える呪文は～？」

「メラです！」

「せいか～い！では第２問、爆発系の初歩呪文は～？」

「イオです！」

立て続けに２問正解、いい調子だ、頑張れアリスト！

「では第３問～、氷結系の呪文は全部で何種類あるでしょう～？」

「えーと、氷結系はヒャド、ヒャダルコ、マヒャドだから…３種類です！」

…あ。

「不正解～、ヒャダインを忘れてま～す。」

そうなんだよなー、なぜか氷結系は４種類あるんだよな、しかもヒャダインのみ効果範囲が広い。
それにして二人とも氷結系の問題で失格とは…きっとトラウマになるに違いない。

逃げても無駄と判断したのか母さんから小瓶を受け取るアリスト、その顔は捨てられた子猫のようである。

最後にちらっとこっちを見て、ボクと友だちでいてくれてありがとう…と言うと中身を飲み干し、そのまま倒れ物言わぬ物体となった。

そうして冒頭に戻るわけである。

先に犠牲になった二人の様子を見るにアレは人が手を出してはいけないものに違いない、なんとしても正解しなければ。

幸い初めての試験だからかはわからないが、そこまで難易度の高い問題は出ていない。普段勉強しているなら平気なはずだ。

「では第1問～、とうぞくがフローミを覚えるＬｖは～？」

「Ｌｖ１０だ！」

「正解～、では第2問、爆発系最強の呪文は～？」

「イオナズンだ！」

「正解～ウィルには簡単すぎるかしらね～、では第3問～スクルトの効果と覚えるしょくぎょう、Ｌｖを答えなさい～。」

難易度が急に上がった！？いきなり3つも答えなければいけないとは、てかこれで3～5問でいいじゃん！

だがまあこのくらいならまだ大丈夫！

「効果は味方全員の守備力上昇！覚えるのはまほうつかいとけんじ

ゃ！Ｌｖはどちらも９だ！」

「せいか～い！さすがねウィル～、母さん嬉しいわ～。では第４問、ルーラとリレミトの違いを説明しなさい～。」

お、ちょっと易しくなったな、旅人の必須呪文を間違えようもない、とうぞくは覚えないけどね！

「ルーラは訪れたことのある町に一瞬で移動する、リレミトは洞窟などから瞬時に脱出する！」

「正解～、ちなみに洞窟でルーラ使うと頭ぶつけるから気をつけてね～。」

パパとママは洞窟で頭打って倒れてたママをパパが助けてくれたのが出会いなのよ～、と二人の馴れ初めを語ってくれた。
なんというかもう言葉に出来ない…母さんのことだから頭を打ったのは初めてではないはずだ、だからちょっとネジが外れてるのか？

「なんか今失礼なこと考えてたわね～？では第５問～、ニフラムとバシルーラの共通点を述べなさい～。」

うぉっ！心を読まれたのかいきなり難易度上がりすぎだろ！？
しかもなんだその問題、全くわからんぞ！？

待て待て、落ち着いて考えよう、まずは２つの呪文の効果は…
ニフラム…聖なる力で敵を消し去る。
バシルーラ…敵をどこかへ飛ばす。
だったはずだ。

覚えるのはＬｖは違うもののそうりょとけんじゃ、これは一瞬共通点かと思ったが、ニフラムはゆうしゃも覚えるはずだ。
なのできっと引っ掛け問題になっているはず、だまされないぜ、母さん。

ならば効果か？だがニフラムは敵を消すのに対しバシルーラはどこかにやってしまうだけ、根本が違う。
…ん？根本？

そういえば２つとも戦闘を強制的に終了させる効果だよな？でも２つとも実際に戦闘を行うわけじゃない…そこから導き出される回答は…

「わかった！２つとも魔物と戦った経験にはカウントされない！」

「せいか～い！結構悩んでいたみたいだけどよくわかったわね～、偉いわよ～。」

そう言って抱きしめられ、頭をなでられた。ちょっと気恥ずかしいが褒めてくれたことは嬉しい。
そしてなにより虹色七号の餌食にならずに済んだ自分に心から賞賛を贈りたい。
これからも気を抜かずに勉強は続けることにしよう。

「さあ～、おやつも用意してあるしそろそろ休憩にしましょうか～。」

そう言って部屋から出ていく俺と母さん、今日のおやつはいつもより美味しく感じられそうである。

地下室に取り残された２つの物体、その片方がうめき声のようなものを上げた。

「アリスト…生きてるか？」

「はい、なんとか…。」

「なんで俺はこうなったかいまだに分からないんだが…。」

「ロックさんはせめて氷結系くらいは抑えておいたほうがいいですよ、人のことは言えないけど…」

二人の男たちが、氷結系を極めようと決心した日でもあった。

第八話（後書き）

という訳で試験編でした。
レイさん当初こんなに強力なキャラではなかったんですがいつの間にかこんなことに。

そろそろ戦闘訓練もはじめられればと思います。
冒険は…まだ先かなぁ…。

人物紹介　そのいち（前書き）

ほとんど出ていませんがとりあえず現時点での人物紹介です。
まだ明かせない部分もあるのでさらっとしていますが、逆に本編で説明不足な部分の補足なんかもしていますのであわせてどうぞ。

人物紹介　そのいち

ウィル　男　性格やさしいひと
物語の主人公。
有名な冒険家の父、研究者の母の間に生を受けるが、
生まれながらにして加護の力が弱く、最大Ｌｖは２０。

それが原因で幼少の頃よりいじめられていたが、
両親の指導によりやさぐれたりせず成長した。

ただコンプレックスは抜けきれず自分の力不足をどうにかしたいと思っている。
その反動なのか、自分の力でできることには積極的に関わっていき、
頼まれたことは断ることができないやさしいひと、悪く言えばおひとよし。

加護の力は弱いならそれ以外の技術で補えばいいと父より戦い方、
母からは呪文に関する知識や研究成果などを教わっている。

父と同じくとうぞくを目指している、理由は一番安定していそうだから。

基本的には常識人だが、困っている人がいたら首を突っ込むことが多く知らないうちに単独行動になることもしばしば。

勇者に対しては多少の劣等感はあるが、初めての友達であるし、基本的には親友だと思っている（恋愛感情には全く気づいていない）。
見た目は身長高めのドラクエ３とうぞくそのまま、目付きが少し優しいくらい。

一人称は「俺」

アリスト　男　性格さびしがりや
男の娘。見た目女勇者で中身が男という風に捉えてください。
加護の力は最大Ｌｖ？？？、つまりは無限に成長するチートキャラ。
偉大な父オルテガの息子と小さい頃から周囲に言われてきたが、
本人にとっての印象はパンツ一丁にマントのむさくるしいおっさん
程度（あまり覚えていない）。

母からは「あの人の息子」、祖父からは「あいつの息子でわしの孫」
、まわりからも
「オルテガさんの息子」とほとんど自分を見てくれる人がおらず、
表面上は立派な人間を務めていたが、常に孤独を感じていた（友達
がいなかった）。

ある日一人寂しくうずくまっているところにウィルが現れいつも通
りの自分を演じようとするが、ウィルに見抜かれてしまう。ここで
単純に友達としての関係になれればよかったのだが、あろうことか
ウィルの言った、

「もう泣かないで、君が寂しくなくなるまで一緒にいてあげるから。
」という言葉を
「もう泣かないで、君が寂しくなくなるまで一生そばにいてあげる
から。」と聞き間違えた上に、何をトチ狂ったかそれをプロポーズ

の言葉と受け取りそれ以降彼に恋愛感情を抱く（２人とも男です）。

それからはウィルと共に行動する（くっついて回る）ようになる。Ｌｖが上がらないがそれに悲観すること無く、諦めずに努力を続ける彼に惚れ直すと共に、自分が守ってあげればいいという結論にいたり、ウィルと一緒に訓練を始める。

現在は近接戦もこなせるまほうつかい、いわゆる魔法剣士を目指しており、レイの指導のもと日々特に知識方面を重点的に訓練している。

だからと言って冒険をしたいとか父親を探したいとかではなく、あくまでウィルと平穏に暮らせればいいと思っている。

一人称は「ボク」

ロック　自称トレジャーハンター　性格いのちしらず

ウィルの父、世界的に有名な冒険家。最大Ｌｖは９６。

直感的な行動により様々な業績を残すが、本人はあまり自覚していない。

かしこさは低めのお馬鹿さん、時々別の世界の言葉のような単語を使う。

しょくぎょうはとうぞくなのだが本人はあくまでトレジャーハンターと言い切っている。

攻撃とアイテム奪取を同時に行う「ぶんどる」は現在彼にしか使えない奥義。

妻、息子のことを大事にしており、ウィルには加護がないからと落胆したりせず。
むしろそんなものはなくても強くはなれると彼に戦い方を教えている。

ウィルが生まれてからは家族を守るために家にいるが、息子に友達もできたし鍛えて強くなってきてもいるのでそろそろ冒険に出たいと密かに思っている。

アリストについては家族になるのは構わないが、嫁？としてくるのはさすがにいかんだろうと思っている。

見た目はＦＦ６のロックそのまま、口癖は「守ってみせる！」

レイ　主婦、元研究者　性格のんきもの
ウィルの母、元まほうつかいにして各方面に音に聞こえた研究者。
最大Ｌｖは８８。

普段は何も考えてないようなおとぼけキャラだが、興味が湧いたら突き進む。
夫同様ウィルを愛しており、彼が強く生きられるよう色々と教育する。

怒るといつもより口調が間延びする。

自作の燃える水と呼ばれる液体とメラの組み合わせによるボムを得意技とする。

ロックとの出会いは、洞窟内で間違えてルーラを使ってしまい、気絶していたところを彼に助けられたのがはじまり。

見た目はロックと同じくＦＦ６のレイチェル、名前は原作的に四文字のほうがいいかなと短縮。作者が個人的にこのカップリングをさせてあげたいがためだけにこうなりました。

ちなみにアリストについては思うところがあるのか家事を教えたり強化計画を発動したりと何かと応援している。

人物紹介　そのいち（後書き）

という訳で人物紹介でした。

ちなみに作者はＦＦ４～６が大好きなのでこれからもちょくちょく出てくると思います。

というかおそらく次回出る予定ですｗ

またある程度人物増えてきたらその都度紹介さらっとしていきます。

第九話（前書き）

なんとか間に合いました。
今回からは戦闘訓練編、新キャラが二人ほど増えます。

第九話

「すまん、ウィル。冒険が俺を呼んでいるんだ！」

「へ？」

いつもの勉強ではなく、その日は父さん指導のもと特技の習得に励んでいた時のことだった。

本来なら戦闘訓練をしたかったのだが、まだ体ができていない状態では危険が増すし、先にある程度「加護」の部分強化ができたほうが技術も伸びやすいと珍しくまともなことを言った父さんの方針に従っているのである。

それからは以前述べたとうぞくの必須スキル３つを中心に練習をはじめた。

「加護」の部分強化自体は実はそんなに難しいことではないらしく、うっすらと体にまとっている「加護」を強化したい場所に集中させることによって行う。

目に集中すればタカのめになるし、鼻に集中すればとうぞくのはなになるといった感じだ。

本来の用途である建造物の発見や、周囲の宝の察知に使うのならば覚えるだけでいいのだが、父さんのぶんどるのように戦闘に応用させるとなると、素早い発動が必要されるため、そこは要練習という

ことである。

俺は一番初めが苦労した、準備段階として自分のまとっている「加護」の感覚をつかむところから始まったのだが、思い出して欲しい、なぜ俺がいじめられていたのかを。

そう、もともと「加護」の力が弱く、しょくぎょう?は村人でＬｖ１の俺をまとう「加護」はかなりひ弱だったのだ。そのせいでなかなか特技の習得の段階に進むことが出来なかった。

来る日も来る日も集中し、自分の「加護」を探しだすことに必死になった。

父さんはなんか体中にモワーっとしてるやつだ！と感覚的だから意味がわからず。

母さんにはこれを飲んだらわかるわよ～、と何かを飲まされ生死の狭間をさまよったが結局わからずじまい。

一発で感覚をつかんだアリストは応援してくれたが、逆に俺のメンタルを傷つけていった。

そうしてようやく見つけた時はあまりの嬉しさにアリストに抱きついてしまい、アリストは頭から煙を吹き出し失神してしまった。

そりゃあ男に抱きつかれても嬉しくはないだろうが気絶するほど嫌がらなくてもいいじゃないか。

そこからは意外とすんなり次の段階に進むことができた。

集中し、自分の「加護」を実際に体の一部分に集めていくのは先ほどの説明の通り俺にとってはそれほど難しくはなく、初歩的ではあるが３つともスキルを使用することはできた。

アリストは集中するのが苦手らしくなかなか「加護」の部分強化がうまくいっていなかった。
今も練習中なのか目をくわっと大きく開きながらむむむ…！とか言っている、それはただ力んでいるだけじゃないのか？

そして俺は3つのスキルの練習のために父さんが作り出した訓練器具を使っている。
タカのめは長距離での視力測定、とうぞくのはなは袋がいくつかぶら下がっており、その中からゴールドの入ったものだけを嗅覚で探し当てる。
しのびあしは貝殻が敷き詰めてある仮設の通路を音を立てないように歩くというものである。

そんな毎日を過ごす中、今日も今日とていつものように訓練を始めようと思った矢先、父さんが先ほどの意味のわからないことを言い出したのである。

「本当はお前が成長するまでは控えようと思っていたんだけどな、アリストっていう友達もできたしお前自身も強くなることを選択した。そしてなにより俺の中の冒険心が叫び続けているんだ！」

きっと3つ目が本心なのだろう。
そして確かに強くなることは選択したけども肝心の戦い方をひとつも習ってないんだ、そこはどうするつもりなんだよ？

「心配ない！ちゃんと知り合いに訓練をしてもらうよう依頼してある！」

なんでも俺とアリストそれぞれに戦い方を教えてくれる人を用意してくれているらしい。
言われてみれば俺はともかくアリストは剣での戦闘がしたいみたいだからな、父さんとはスタイルが違うわけだから当然といえば当然か。

おそらく明日頃には到着するだろうからしっかり鍛えてもらうんだぞ！
と言い残し風の様に去っていった父さん、てかもう行っちゃうのかよ！？

…えーと、整理しよう。
父旅に出る→俺取り残される→戦いを教えてくれる人は明日来る→今日は？

「いつもどおりの訓練でもするか…。」

俺はしのびあしの練習を始めるのであった、だって他の一人じゃできないし。
ちなみにアリストは目に力を入れてずっと開いていたせいか目が真っ赤になっていたが、結局今日もうまくいかなかったらしく落ち込んでいた。

次の日、いつものように家の近くの訓練場所でそろそろ始めようかと話していると、男の人と女の人が俺達に近づいてきた。
この人達が父さんの言っていた人たちかな？と思い挨拶をしようとしたら先に女の人が口を開いた。

「あんた達がロックの言ってたウィルとアリストかい？」

意外とワイルドな口調の人らしい、とりあえず「そうです」と答えると、

「あたしはアイラっていうんだ、しょくぎょうはせんしをやってる、剣を主体に戦ってるからアリストっていう方の先生になるのかな。とにかくよろしく頼むよ。」

「あ、じゃあボクの先生ですね、よろしくお願いします！」

とアリストも挨拶をする、結構気さくな人みたいだ。
ただ、格好が…長い黒髪に凛とした顔つき、そして赤を貴重としたビキニのような露出の高い鎧からは大きな谷間が覗いていて、正直目のやり場に困る。

よくアリストは大丈夫だなってなぜ俺の方を睨んでいるんだ？聞いてみたらなんでもないよ！とそっぽを向いてしまった。その様子を見ていたアイラさんは何かを察したようで。

「アハハ、じゃあアリストはこっちで私と訓練しようか。」

と言って少し離れた場所へ行ってしまった、残されたのは俺ともう一人の男の人。

格好は言葉の通り黒づくめ、上から下まで黒の装束に身を包んでおり、更には顔の前にも黒い布をつけているため目しか見えない。

「あ、あの…」

「…。」

「俺、ウィルって言います。父さん…ロックの息子です。これからよろしくお願いします。」

「…。」

き、気まずい、てか一言も話してくれないんだけどこの人…
そういえば名前すらわからない、聞いてもいいのだろうか？よし！
ここは勇気を出して！

「え、えーと、お、おなまえ…。」

「…あいつから報酬をもらっている以上仕事はするが慣れ合うつもりはない。」

俺の勇気は無残にも砕け散った、名前も教えてくれないってどうしろっていうんだよ！
向こうはなんか楽しそうに話しながら訓練してるっぽいのに、もう心が折れそうだよ父さん…

ウォン！！

俺が現実の厳しさに挫けそうになっていると、後ろから何かの声がし、急に服を引っ張られた。
驚いて何が起きたんだと引っ張られた方を見てみると、黒と茶の毛色の犬が俺の目の前に現れた。

どっかから迷い込んだのか？それにしても立派な犬だなー、どれ、現実逃避の意味も込めて存分に可愛がってやろうじゃないか。

よーしよしよしよしよしと頭、首、体となで回してやると、ヘッヘッヘッヘッと舌を出しながら気持ちよさそうに目を細めるわんこ、ささくれだった俺の心が癒される。

「まさか…インターセプターが懐くとは…。」

声のした方に目を向けると何やら驚いている様子の黒づくめの人、もしかしてこの人の飼ってる犬だったのかな？名前っぽいの呼んでたし。

動物は飼い主に似るからこの犬もこんなに黒いのかなーなんて馬鹿な事を考えていると、俺の顔を見ながら黒づくめの人が声をかけてきた。

「気が変わった、お前には俺の戦いの技術全てを叩きこんでやる。弱音を吐こうが容赦はしないから覚悟をしておけ。」

そう言って背中を向け去っていく。
え？なんで？さっきまで全くやる気なさそうだったのに。もしかして犬？犬が決め手？

全く意味がわからないがわかることはひとつ、戦い方はちゃんと教えてくれるということ、ならば言う言葉は決まっている。

「はい！これからよろしくお願いします！えっと…。」

「…クライドだ、俺のことはそう呼べ。」

「は、はい！よろしくお願いしますクライドさん！」

俺の言葉を聞き少しだけこっちを見ると、また背を向け歩いて行く。

こうして俺にも師匠ができた、全て、というくらいなのだから相当きつい毎日にはなるだろう。怪我もするし弱音も吐くかもしれない。

でも俺のために教えてくれるといったんだ、どんなことでも乗り切ってみせる！

去っていくクライドさんの背中を見つめながら決意を新たにする俺だった。

…あれ？背中？

「クライドさん、今日は一体何をするんですか？」

「…とりあえず今まで通りの訓練をしておけ。」

逃げるようにその場から離れていくクライドさん、どうやら考えていなかったらしい。

少しだけ脱力した俺はしのびあしの練習を始めるのであった、だっ

て一人なんだもん…

おまけ

「そういえばクライドさん、父さんから報酬をもらったって言ってましたけど何をもらったんですか？」

「これだ。」

クライドさんが取り出したのは深紅の刀身をした長めのナイフ、小太刀というらしい。

「これはいちげきのやいばと言ってな、名前の通り時折敵を一撃で仕留めることができる。俺のような戦い方を行うものには重宝する。」

「そ、そうなんですか、でもそれが重宝する戦い方って…。」

「それはお前がこれから身を持って知っていくことになる、楽しみにしていろ。」

俺は暗殺者にでもなるのだろうか。

自分の未来の姿があの真っ黒な格好だと思うとすこしばかり気が重くなったある晴れた日のことであった。

第九話（後書き）

まさかの戦闘訓練に入らず終了、本当に申し訳ないです…。
黒づくめの人のほうなんですが、せっかくなので本名で出しました。
アイラはまんまです。時系列は完全無視です。

今更ではありますが評価していただいた方、お気に入り登録してくださった方、なにより読んでいただいた方々、本当にありがとうございます。
グダグダでなかなか先に進みませんがこれからもよろしくお願いします。

第十話（前書き）

今回は修行編です。

第十話

今日からはクライドさん指導の元戦闘訓練が始まる。

お互い別の所で訓練したほうが効率がいいというアイラさんの言葉により、しばらくアリストとは別行動をすることになった。

意気揚々とするアイラさんに引っ張られていくアリスト、心なしか顔がやつれているように見える。

と言うのも二人と母さんは顔なじみらしく、俺達に稽古をつけてくれる間はうちで寝泊まりすることになったのだが、夜に母さんとアイラさんが酒盛りをはじめてしまい、半ば強制的に参加させられたアリストは結構ひどい目にあったようである。

ちなみにクライドさんは身を隠していたのだが、インターセプターが隠れていなかったため居場所を特定され連行されていた。

まるで脱出不可能な大陸に一人取り残され死を覚悟したかのような目で、「あいつのことを頼む…！」と俺に告げながら連れて行かれるクライドさんに涙せずにはいられなかった。

俺？俺はインターセプターと一緒に寝たよ？犬ってもふもふでいいよねー。

話を戻そう、ここはいつもの訓練場。

朝起きても姿を見かけなかったのでとりあえず向かってみたところ

既にそこで待っていた。

インターセプターにエサをやっていたようで俺に気づくとこちらを向いた、顔に巻かれた布の隙間から見える目は赤く充血していてこう言ってはなんだがすごく怖い。やっぱり眠れなかったのだろうか。

「おはようございますクライドさん、あの、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、問題ない。」

それよりも早速はじめるぞ、と少しかすれた声でいうクライドさん。見た感じ大丈夫ではなさそうだが、あまりうるさく言っても仕方が無いことなので気持ちを切り替える。

そこからはまずクライドさんの戦闘方法について話を聞くことになった、大きく分けると3つになるとクライドさん。

一つ目はナイフ、または小太刀を使った戦闘方法。

二つ目はインターセプターとの連携攻撃。

三つ目は投てき術、「なげる」による攻撃、だそうである。

一つ目はできるだけ無駄な動きを省き、的確に急所を狙う。そういった意味ではお前の父親のぶんどるに似ているかもなと言われた。

二つ目は自分が敵の攻撃をいなし、その間にインターセプターに攻撃をさせる。敵の攻撃を防ぐ、または受け流す技術が必要となる。

そして三つ目はクライドさんの奥義とも言えるらしく、目、腕の「加護」強化により石だろうがなんだろうが必殺の武器と化すそうだ。

その気になれば馬の糞で敵を倒すこともできるらしい。その気にならないことを祈るばかりである。

「どれも一番重要なのは目の強化となるが…お前は今どのくらい使いこなしている？」

「えっと、父さんからはそのＬｖでそれくらいなら使いこなしている方だとは言われましたけど。」

ふむ、なら大丈夫か、ではなげるの訓練からはじめるとしようと言って何やら人の大きさほどの板を持ってくるクライドさん。

その板には人の形をした線が描かれており、更に急所となるであろう頭、喉、心臓の部分に印がついている。

「実戦では対象は動きまわる上に魔物というのは人型でないことが多い、だが初めての練習であるしとりあえずはこれでいいだろう。」

的から距離を取りはじめるクライドさん、あんな板あったっけ？もしかして作ったのか？

二日酔いの体に鞭打ちながら板に人型の絵を描いていくクライドさん、シュールだ…

思わず吹き出してしまった俺の様子に気づくことはなく、これを使ってもらう、と手渡されたのが刃が十字の形をした小さな鉄の塊。

しゅりけんと言う投てき武器らしく、これならばちゃんと的に当たりさえすれば必ず刺さるので上達が見えやすいとのことだ。

「さっきも言ったが重要なのは目と腕の強化だ、相手の急所から目を離さず避けられない速度で放て。」

そういって的の方に向き直り構えをとる。そして次の瞬間。

ドカカカカカ！

いつの間に投げたのか全くわからない、そんな速さで腕を振りぬく。板の人型を見ると、急所の部分に各２つずつのしゅりけんが刺さっていた。

「す、すごい…。」

「さあ、次はお前の番だ、やってみろ。」

なんでもないような振る舞いで俺を促すクライドさん。

俺は的の前に立ち、見よう見まねで構えをとる。

クライドさんみたいにいかないのはわかっている、でも大事なのは集中だ、まずは目を強化し対象を捉える。

更に集中、決して目をはなさない、天地と一体となり、宇宙と和合すべし。
そして腕を強化、一瞬で振りぬく、そこだ！

シュカッ！

見事しゅりけんは的に刺さった！…人型の股間部分に。
下手したら急所に刺さるより恐ろしいかもしれない、思わず小さな悲鳴を上げながら前かがみになってしまった俺は悪くないはずだ。
クライドさんもなんとも言えない表情で、
「うむ…初めてにしては上出来、というべきなのだろうか…。」
ものすごく微妙な空気の中練習は再開された。

その後は刺さったり刺さらなかったりを繰り返しながらしゅりけんを投げ続けた。ある程度時間が経った後、あまり長くやっても集中力が持たないとのことでなげるの練習は切り上げることになった。
続いては実際の戦闘訓練にはいるらしい。
こちらも俺の実力がわからないため、とりあえず今回はどのくらい俺が戦えるのかを試すらしい。俺は防御に徹するから好きなように攻撃してくるといいと言われ、構える。

以下あまりにひどい戦いのためダイジェストでお送りいたします。

クライドが　あらわれた！

ウィルのこうげき！　ミス！　クライドにダメージを与えられない！

クライドは　ようすをみている

ウィルのこうげき！　ミス！　クライドにダメージを与えられない！

クライドは　ようすをみている

ウィルは　石をなげつけた！

だが　クライドに　はじかれてしまった！

はじかれた石が　ウィルの頭にちょくげき！　かいしんのいちげき！　ウィルは　ちからつきた！

クライドは　ことばをうしなっている

俺の前途は多難なようである。

おまけ　昨日の夜

「アハハハ！」

「うふふふ～。」

「うぅ…。」

「…。」

二時間後…

「アハハハハハハ！」

「うふふふふふふ～。」

「も、もうダメ…。」

「……。」

夜はまだまだ長い…。

第十話（後書き）

修行、ウィル編でした。
次回はアリスト編になる予定です。

あと念のため注意なんですが、あらすじにも書いてるとおりあまり重い話にはしないつもりです、作者がそういう空気に耐えられないので…。

ただどうしても最初は設定とかの関係で重くなってしまいましたが、基本的にはこういうノリで行けたらと考えています。

では長くなってしまいましたが次回もよろしくお願いします。

第十一話（前書き）

修行、アリスト編です。

第十一話

ウィルとクライドが訓練をしているのとちょうど同じ時間、別の場所ではアイラとアリストが訓練を開始しようとしていた。

昨夜あれだけの酒盛りを繰り広げたのにもかかわらず元気いっぱいのアイラ。鼻歌まじりで準備をしている。

「うう…、なんでアイラさんは平気なんだろう…？」

対して顔色がすぐれないアリスト、それもそのはず、彼は二匹のうわばみを相手に奮闘していたのだ。

しかも彼は未成年ゆえに酒をのむことができない、素面で酔っぱらいの相手をするのは想像を絶する辛さがある。

レイからはロックとの出会いを中心に惚気話。

アイラからは逆に全く出会いがないと愚痴を延々聞かされて終始グロッキー状態だった。

ただレイからウィルの小さい時の話や、アイラからは気になった相手を誘惑する方法などを聞いた時は目をキラキラさせながら次は次はと話を促し、言葉を深く心にきざみこんだようである。

「クライドさん、大丈夫かな…。」

今はここにいないもう一人の犠牲者を思い浮かべる。

はじめは見た目と雰囲気に少し驚いて話しかけづらかった彼だったが、ウィルからも改めて紹介されたし、なにより昨日の晩に妙な連帯感が生まれた。

酒盛りの最中アリストより先に二人の猛攻にあっていた彼、始まる直前にアリストに対し、

「はじめは俺が出来るだけ時間を稼ぐ…だが次はお前の番だ、覚悟しておくんだな…。」

と告げて自ら戦火の中に飛び込んでいった。

「いい年していつまでそんな真っ黒な格好してるんだよ！」とか「それで娘さんには会いに行ったのかしら～？」とか根掘り葉掘り聞いてこようとする二人にひとことふたこと、もしくは無言を貫き対応していたのだが、結局は潰されてしまった。

考え直してみれば先に潰れてしまった方がのちのち楽だったのではという思いはあるにはあったが、せっかく進んでしてくれたことなので素直に感謝しておいた。

朝には既にいなくなっていたので大丈夫だとは思うが、帰ったら酔い覚ましの薬草を渡そうと考えているアリストであった。

「さーて、そろそろ戻っておいでアリスト。」

アイラにそう言われてはっと意識を取り戻す、どうやら思考の海に沈んでいたらしい。

これから訓練が始まるんだ、と気を引き締めなおす。

「さて、昨日も言ったとおりあたしは剣を主体に戦っているんだけど、剣は使ったことあるかい？」

いいえ、全く無いです。とアリスト、それもそのはず、知り合いに剣を扱う人はいなかったし今まではずっと基礎の訓練をしてきたのである。

ならまずは剣自体になれてもらわないとね、そう言って剣の形をかたどった木の棒をアリストに手渡すアイラ、最初はこれを使っての素振りから行うそうだ。

「えっと、振り方なんかはどうすれば…？」

「ああ、そうだったね、せんしの場合は盾も使うから基本的には片手で振ることになるね。でもあたしはちょっと特殊で両手で使うこともあるんだ。」

だから右、左、両手持ちと均等にこなした方がいいねと言われる、両手持ちの理由はまたあとで教えてくれるらしい。

そして素振りをする際に重要なのが、必ず対象をイメージしながら行うということだそうだ。

例えば同じ回数行ったとしてもイメージするかしないかでかなり効果が変わってくる、明確なイメージをすることが出来ればそれはもはや実戦と変わらない。

「ただ今は戦いのイメージ自体がないと思うからとりあえず殴りや

すい相手でも頭に浮かべるといいよ。」

「殴りやすい相手、ですか…。」

眠気覚ましにもなるだろうしやってみるといいよ、しばらくしたらまた来るから、と言って去っていくアイラ。

あれ？もっと詳しい振り方とかは教えてくれないの？と少々腑に落ちないとこはあったが、なにはともあれ初めての戦闘訓練、気を取り直し木の剣を構え、殴りやすい相手を探す。

ウィル…絶対に無理、レイさん…後が怖いので無理、アイラさん…同じく後が怖いので無理、クライドさん…昨日の今日だから殴りづらい、ロックさん…まぁ、ありかな？

なかなか誰を対象にするか決めかねていたが、ふとものすごく最適なイメージが目の前に現れる。

筋骨隆々のたくましい体に広い肩幅、歴戦の勇士にふさわしいその体躯にはビキニパンツとマントが装着されている。

そう、かつてアリアハンの英雄と呼ばれ、自らの父でもある「オルテガ」その人であった。

それにしても父が一番殴りやすく、次点が親友の父とは二人が浮かばれない。

本人のことはほとんど覚えていないのにイメージだけがしっかりと出てきたそれを見てニヤッと笑うアリスト、なんのためらいもなく素振りをはじめる。

まずは右上から相手の左肩を打ち据えるように袈裟斬り、次いで振り下ろした勢いを利用し左から右へと水平に薙ぎ払い右手に持つ武器を叩き落す。

そのまま今度は右下から左上への切り上げにより左に構える盾をはじき飛ばす。

一旦呼吸を置き、渾身の力を込めて相手の無防備になった喉へと突きを繰り出す、相手は死ぬ。

その後も様々な方法で父の影を殴り続けるアリスト、その顔は清々しく、常に笑顔であった。

そんな様子を少し遠巻きに見ていたアイラは、

「あの子、ホントに剣を使うの初めてなのかい？随分と手馴れているように感じるけど…。」

急に剣を後ろに構え、少し力を溜めたような素振りを見せた後「イヤァァァ！」と言いながら回転切りを放つアリスト。

「それにしても誰を想像したのかしらないけど、きっと恨みでもあったんだろうねえ…。」

彼に秘められた才能に興味を示すと共に、イメージの相手に同情をしてしまうアイラだった。

ある程度時間が経った所で素振りはそこまで、とアリストに終了の

指示を出すアイラ。
少し物足りないような顔をしていたアリストだったが、素振りは基本だからかかさず行うようにと言われ次の訓練にはいることにした。

「さて、今度はあたしの奥義に挑戦してもらうよ。」

相手はこれでいいかな、と適当な丸太を立てる、そして少しアリストから距離を取り軽快なステップを踏み出す、それはまるで踊りのようであり、思わず「きれい…。」とつぶやくアリスト、それを見たアイラは不敵な笑みを浮かべると。

「これがあたしの得意技、つるぎのまいだ！」

そのまま流れるような足の動きを止めること無く瞬時に攻撃を繰り出す。
ほぼ同時に放たれたかのように見えた剣閃によって丸太は４つに分断される。

更に宙に舞い上がった丸太の１つに体を向けると、武器を両手に握り直し、力強く斬りつける。

ヒュンッ！という高い音が鳴ったかと思うと、丸太だったものはただの木片へと変化していた。

「どうだい、あたしの技は？」

「す、すごい！すごいですアイラさん！」

鼻息荒くボクも使ってみたいです！というアリストへ満足そうに頷くアイラ。

じゃあまずは基本の動きから覚えようか、と説明しはじめる。

アイラはもともと部族に伝わる踊りを代々引き継いでいく家に生まれたらしく、物心ついた時から踊ることを学ばされていた。

しかしそんな生活に嫌気が差し、冒険者となることを夢見ていた彼女はある日決意し部族から逃げ出す。

「父親を殴って飛び出してきちまったよ。」と自嘲気味に言っていたが、アリストは強い共感を覚えたようである。

そうして旅をしている最中にロック、レイと出会い色々と世話になったそうで、つるぎのまいも、「せっかく得意なことがあるんだから活かした方がいい」と三人で編み出した技らしい。

つるぎのまいは名前の通り剣と踊りの融合である。
まずは踊りをベースとしたステップを開始する、この動きは敵の攻撃を回避しやすくなるらしく、みかわしきゃくと呼ばれている。
そしてみかわしきゃくを使用しながら、「加護」の力を体の各部分に集中させていく。

この時、「加護」の分配具合によって攻撃方法が変わる。
体中にまんべんなく広げた場合はステップを活かした素早い連撃が可能になるし、両腕に集中させた場合は強力な一撃を相手にお見舞いできるといったところである。

両手持ちも使うっていうのはそういうことさ、と先ほどの疑問に答えるアイラ。

「説明はこんなところかな、さっそくみかわしきゃくの練習からやってみようか。」

「はい！」

以下、再びダイジェストによりお送りいたします。

アイラが　あらわれた！

アイラは　ようすをみている

アリストは　ステップをきざみはじめた！

アイラの　ＭＰが４さがった！

「ちょ、ちょっと待ちなアリスト！」

「え？なんですか？」

「なんだいそのへんてこな踊りは？しかも見てたら急に力が抜けたんだが…。」

「へんてこって…、とりあえずもう一回やってみますね。」

アイラが　あらわれた！

アイラは　ようすをみている

アリストは　ステップをきざみはじめた！

アイラの　ＭＰが６さがった！

「アリスト…。」

「な、なんですか？」

「とりあえず子供向けのお遊戯からはじめよっか…。」

「え、えぇ！？」

アリストの前途も多難なようである。

おまけ

「ただいまー…、まだ頭がズキズキする…。」

一日目の訓練が終わり家へと帰ってきたウィル。

居間のソファの上にはぐったりとした表情で寝そべっているアイラ。

「アイラさんどうしたんですか？今頃になって二日酔いとか？」

「ああ…おかえりウィル、あたしのことはいいからアリストを元気づけてやってくれないか？」

あんたの部屋にいると思うからさと言って眼を閉じてしまった。

よくわからないが落ち込んでいるのかと部屋に入ると、隅で体育座りをしてめそめそと泣いているアリスト、心なしか背中には世の中の全ての絶望を背負ってしまったかのような哀愁が漂っている。

「あ、アリスト？どうした？何かあったのか。」

「ウィル…ごめんね、ボクもう君を守ってあげられないかもしれない…。」

そう言って再び泣き出すアリスト、いまだに意味がわかっていなかったが、とりあえず彼を慰めはじめるウィルであった。

アリストは　ふしぎなおどりを　おぼえた！

第十一話（後書き）

はじめはアイラつながりで流星剣でも使わせようかなと思ったんですがやっぱりこっちにしました。
ちなみに連撃がドラクエ版で両手持ちがＦＦ５版のイメージです。

アリストがこれ以降不思議な踊りを使うことはおそらくないと思いますｗ

第十二話（前書き）

ちょっと長めです。

第十二話

クライドさんとの戦闘訓練がはじまってから結構な時間が経った。

最初はなげる以外に関しては目も当てられない様な状況だったが、毎日真面目に訓練を行った結果なのか、今ではインターセプターとの連携攻撃の練習の段階まで進んでいた。

これは前も言ったとおりこちらが攻撃を防いでいる間にインターセプターに攻撃をしてもらうというものである。

普段は人に懐かない犬なのだが、お前なら可能だろうと少し優しい目で言ってくれた。

それにしても彼は賢い犬で、俺の手の回らない部分の動きをカバーしてくれるし、こっちの指示には的確に従ってくれる。

もしかしたら人間の言葉を理解しているのかもしれない、そしてなによりもふもふで癒される。

さすがにインターセプターはやるわけにはいかないとクライドさんに言われてしまったため、非常に残念だが俺の癒しはなくなってしまう、が、いつか俺にも相棒となる存在が現れるかもしれない、その時はきっとこの経験が活かされるんだろうと思い励んでいる。

さて、そんな日々を過ごしていたある日突如クライドさんが、「今日は実戦を行なってもらう。」と言い出した。

というのも戦いの技術、基礎的な体力は訓練によってかなりついてきたが、特技を次の段階に進ませるには少々「加護」の力が弱いらしい。

なので魔物と戦いＬｖを上げ、「加護」の底上げをしてこい、ということである。

してこい、というのは俺一人で行けという意味で、

「ここらの魔物は弱いので訓練を積んだお前なら問題はないだろう、念のためにインターセプターを護衛につける。」

さすがに俺のためとはいえ弱い者いじめをするつもりはないらしく、かくして一人と一匹の初めての実戦がはじまることとなった。

戦うならば必要だと普通の小太刀を一本かり受け、しゅりけんもいくつか手渡された。

防具はさすがに用意出来なかったのでいつもの服、クライドさんに予備の黒装束を着せられそうになったが丁重にお断りした。ちょっと残念そうだった。

怪我をした時用に薬草も何個か持ち準備は万端！

「ではいってきます！」

「ああ、夕飯までには帰れよ。」

なんだか母さんみたいなことを言うクライドさんに背を向け、インターセプターと共に歩き出す。

俺達の冒険は始まったばかりだ！

場所は変わってここはアリアハンの町から少し行ったところにある森の中、晴れているため木漏れ日が差し込んで良い雰囲気である。

そんな中俺たちは一応周りを警戒しながら相手を探して前へと歩みを進めていく。

ここはもう町の外、いつ魔物が出てきてもおかしくない状況なのだ。

「うーん、なかなかいないなー。」

だがいざ探してみると意外と見つけることが出来ず、森の中をうろうろと歩きまわる。

インターセプターも気が抜けてきたのかクァアッと大きなあくびをしている。

と、いきなりインターセプターの耳がピクッと動き、こちらを一度見ると、ついて来いと言わんばかりに先に走って行ってしまった。

慌てて追いつくと、木の影に隠れて向こうの様子をうかがっていた、俺も静かに覗き込む。

ぴ、ぴぃ…

そこでは5匹ほどのスライムが群れになって、ピンク色のスライム

を攻撃していた。

俺の聞いたのはピンクのスライムの声らしく、遠目に見てもかなり弱っているようだった。
それを見た俺の中に静かな怒りが湧き上がる。

ピンクのスライムなんて聞いたことがない、おそらくそれが原因でいじめられているのだろう。

自分たちとは違う、たったそれだけの理由で異分子を排除しようとする、それは魔物でも人間でも変わらないということか。

「ちょうどいい、あいつらには俺の経験になってもらおう。」

そうつぶやくと、インターセプターに目で合図を送る。このくらいは慣れたものだ。

そして懐のしゅりけんを数個取り出し、しのびあしを発動させ足音を消しながら近づいていく。

全く気づくことのないスライムたち、ある程度の距離に来た所で俺はタカのめを発動、相手を視界に捉え、腕を強化ししゅりけんを投げる。

ドスッ！

見事一体に命中、撃破に成功する。さすがに気づかれ、こちらを向いたがその間にもう一つを投げつけ、二体目を仕留めた。こちらに向かって来る残りを相手にするために俺は小太刀を構える。

顔に向かって飛び掛ってくるスライムの攻撃を落ち着いてかわし、カウンターの要領で切り裂くと、真っ二つになるスライム。すごい切れ味だな、この小太刀。

四体目も同じような動きで来たため余裕を持って倒す、だがその隙を突いて最後の一体が襲いかかってくる、ちっ、後ろか！

迎撃しようと振り向いた所で、どこからか現れたインターセプターがスライムに体当たりをかます、木にたたきつけられたスライムはそのまま動かなくなった。

「油断した、助かったよインターセプター。」

任せろ！と言わんばかりにウォン！と一声鳴く、全くもって頼りになる護衛だ。

周りの様子をに気を配ってみたが、どうやら他にはもういないらしい、するといきなり自分の中に変化が起きたことに気づいた。

言葉にはし辛いがなんというか、自分を守る力が強くなったような感覚、きっとこれがＬｖが上がるということなんだろう。

「っとそうだ、あのスライムは！？」

倒れているピンクのスライムに近づくと、まだ息はしているようなので急いで持ってきていた薬草を使う。しばらくすると目を覚ました。

「ぴ、ぴぃ…、っ！ぴぃっ！」

こちらの姿を見るなりその場から逃げ出そうとするスライム、だがまだ体が思うように動かないらしく転んでしまった。

俺はそいつを優しく抱きかかえると、刺激しないよう言葉を重ねた。

「大丈夫、お前をいじめる奴らは今はここにはいないよ。」

「…ぴぃ？」

伝わったのかはわからないが、きょろきょろと周りを見回した後とりあえずおとなしくはなってくれた。さてこれからどうするかな、まだこいつも治りきってるわけではないしいったん家に帰ろうか。

そう考えているとインターセプターが急に茂みに向かって吠え出した。小太刀を構え待ち受けているとそこから飛び出してくる大量のスライムたち。

まだこいつのことを諦めていなかったのか！と再び戦闘になるかと思ったら、俺達には目もくれず逃げるように去っていってしまった。

「な、なんだ？いったい何が…、っ！！」

茂みの向こう、スライムたちが飛び出して来た先に何かいる！

インターセプターもそこから目を離さない、俺は抱き抱えていたスライムを少し離れた木の根元に置くと、「動かないでいてくれ。」と言い、姿を見せはじめた影に対し身構えた。

ガアアアアアア！

やがてその魔物を捉えた時思わず俺は絶句してしまった。
熊のような姿に理性を失った目付き、腕力は凄まじく多くの冒険者を蹴散らしてきたと図鑑でみたことのある魔物。

「グリ…ズリー…！」

そこにはグリズリーがいた、なぜ？ここらに生息するはずのない魔物じゃないか！？

だが今はそんなことを考えている余裕はない、わかっているのは二つ、こいつはＬｖが多少上がっただけの俺が倒せるような相手ではないこと、そしてこいつの目が俺達を逃がすつもりなどないと言っていることである。

今まで味わったことない緊張感に体がふるえ、思うように動かせない。
それに気づいたのかはわからないがゆっくりこちらに近づいてくるグリズリー、くそっ！動け動け動け！

そこへインターセプターがグリズリーに噛み付き注意を逸らしてくれた。
だがグリズリーに吹き飛ばされ体制を崩すインターセプター、やっぱりダメだ。何とかして逃げないと…。

だがどうやって？このスライムを見捨てれば俺たちはおそらく逃げ切れるだろう、逆にこいつを抱えていくとなると俺は手が出せないためインターセプターに頼ることになってしまい、最悪彼を失ってしまうかもしれない。

スライムか、インターセプターか。
普通に考えればスライムは置いていくのだろう、でもせっかく助けたこいつを今更捨てていくのか？いじめる奴はいないという言葉を嘘にしてしまう気か？

…そんなこと俺にはできない。
いい加減腹をくくれウィル、決めたじゃないか、強くなるって、Ｌｖ差なんて関係ないって証明してやるって。
大きく深呼吸をすると大声で叫ぶ、ここで俺がとる選択肢は一つだけだ！

「インターセプター！今から街に戻ってクライドさんを呼んできてくれ！ここは俺が食い止める！」

言うと同時にしゅりけんをグリズリーに投げる、刺さらずダメージにはなっていないがこちらに向き直った。

インターセプターは少し考えていたようだったがウォン！と一声鳴くとかけ出していった、頼んだぜ…。

「さてと…。」

動くようになった体を確かめるように数回ジャンプすると小太刀を構える。
おそらく今の俺ではまともに攻撃を受けてしまった時点で終了だろう、なので最優先事項は回避、下手に攻撃を加えて怒らせてしまっ

ては元も子もない。
目の強化を行う、相手の動きを見逃すことのないように、幸いにもＬｖが上がったおかげかいつもより鮮明に見ることができている。

グリズリーが腕を振り上げる、来る！
大振りのパンチを屈むことによってかわす、続いて反対側の腕の攻撃が来るが、後ろに飛ぶことによって回避する、よし、動きが大きいぶん回避はそこまで難しくはない！

それからはとにかく避け続けた、避ければ避けるほどグリズリーは焦れてきたのか攻撃が単調になり目で追いやすくなっていった。だが俺のスタミナも長くは持たず、少しずつかすり傷が増えはじめていた。

「はぁ、はぁ、はぁ…。まだなのか、インターセプター…。」

「ぴぃー！」

「何！？」

俺の意識が一瞬それた隙に、あろうことかグリズリーは身動きのとれないスライムの方に向かっていった。

「やめろぉーーー！！」

俺は思わずグリズリーに向かって突撃していた。
しかしそんな俺を見てグリズリーはニヤリと笑う、しまっ…
振り向きざまに腕で俺を薙ぎ払う、なんとか小太刀の腹で受け止め

るが、衝撃が殺しきれるわけもなく岩へとたたきつけられる。

「ガハァッ！」

背中を強く打ちつけ呼吸が苦しい、あいつ俺を誘い込むためにわざとスライムを狙うふりをしやがった…！目の前までやってきて腕を振りかぶるグリズリー、さすがにもうどうしようもないな…。

俺が死を覚悟していると突然グリズリーの背中から深紅の刃が生える。

何が起きたんだと考えるまもなく次の瞬間には首を切り落とされ血しぶきをあげて倒れるグリズリー。

その向こう側に見える漆黒の衣装に身を包んだ人物の姿を目に捉えながら俺は意識を失った。

「ここは…。」

気がついた俺の視界にはじめに入ってきたのは見知らぬ天井…ではなく自分の部屋の天井だった。

起き上がると自分の体に包帯が巻いてあるのに気づく、結構かすり傷とはいえ怪我はしたからな。

ふと横を見るとピンクのスライムがこれまた全身包帯だらけですやすやと眠っている、よかったこいつも無事だったんだな…。

「あら～！ウィル目を覚ましたのね～！よかったわ～。」
部屋に入ってきた母さんはそう言うと俺を抱きしめた、正直すごく痛いです。
スライムも目を覚まし、とりあえず居間に来てね～と言われ、スライムを抱きかかえて居間に向かう。
するとそこにはいつぞやの“反省中”の札をぶら下げたクライドさんが正座で待機していた。
「…目が覚めたか。」
「は、はい。」
「まさかあんな所にグリズリーがいるとは思わなくてな、済まなかった。」
「いえ、俺もそれは予想外でしたし…。」
「だがあそこで自分だけが残るという選択はいただけないな。」
それは、もちろんそうだろう。言ってしまえば自分から命を投げ出したようなものである。
「が、あの状況であいつ相手にあそこまで戦えたのなら俺も師として鼻が高い、誇っていいぞ。」
と褒めてくれ、次からは気をつけるようになと言ってくれた。
嬉しくてちょっと泣きそうになったが、正座している姿を見ていると引っ込んでしまった。

「それで、なんでその体勢なんですか？もしかして母さんが…？」

「違うわよ～、自分へのけじめなんですって、クライド君はまじめよね～。」

ちなみに札はせっかくだからと母さんがつけたそうだ、やっぱり半分母さんのせいじゃないか。

「それで～、その子はどうするの～？」

俺の抱いているスライムに目を向ける母さん、こいつはこいつで「ぴぃ？」とか言っている。

「こいつ他の魔物からもいじめられていたみたいなんだ。母さんさえ良ければうちに置きたいんだけど…。」

一応お伺いを立ててみる。

「もちろんいいに決まってるわよ～！でもちゃんとあなたが世話をするのよ～。」

「ああ、わかってる！おい、お前は今日から俺たちの家族だ！」

「ぴぃ！ぴぃ！」

言葉がわかるのか嬉しそうに腕の中で跳ねる、そしてぴょんと飛び上がると俺の頭の上にぽんと着地した。

「あらあら似合ってるわね～、それで？名前はどうするのかしら～？」

母さんがつけてあげましょうか～と言う言葉に即座にお断りをする、どんな名前を付けられるかわかったもんじゃない。
でも名前か…、うーん、珍しいピンクのスライムだし体の色からとって…

「モモはどうだろう？」

「モモちゃんね～、いいんじゃないかしら？あなたはどう～？」

「ぴぃ！」

気に入ってくれたのか元気な声を上げる、よし、名前はモモで決定だ！
こうして俺の家に新たな家族が増えた。

色々と大変な一日だったが、結果的にＬｖも上げることができたし良かったとしよう。

ちなみにグリズリーのぶんの経験はダメージを与えられなかったためカウントされなかった。あのしゅりけんが刺さっていれば…。

おまけ

「ウィル！？その怪我どうしたの！？」

帰ってきたアリストの質問攻めにあい、かくかくしかじかと説明する。

「そうなんだ…あまり無茶なことしないでよね…。で？その頭の上は何？」

俺の頭の上にはモモが乗っている、どうやらお気に入りの場所らしい。

こいつがさっき助けたスライムだよと紹介する、すると目があった一人と一匹は

「ぴぃ！！」

「む…！」

何やら睨みあっている。どうしたんだお前ら。

「ふん！ぽっと出にウィルは渡さなからね！」

「ぴぃ！ぴぃ！」

何やら仲が悪いようだ、仲良くしろよ。

そして俺はお前らのものでは決してないぞ。

モモが　なかまになった！

アリストに　ライバルが生まれた！

第十二話（後書き）

戦闘描写、うまく伝わったでしょうか？なにぶん初めてのことでここまで難しいとは…。

そして新キャラ出ました、出してから気づきました、ぴぃだけで意思を表すのがすごく大変なことに。
あとピンクではありますが、エンゼルスライムではないです。あくまで突然変異的な捉え方でお願いします。

第十三話（前書き）

感想にて「一般の人の最大Ｌｖが６０～７０あるのは高すぎる」という指摘をいただき、「高くてＬｖ５０」に修正いたしました。

作者の思いつきのみで進んでいくこの小説、次はどんなほころびが出てくるのか。既に取り返しの付かないところまで来ている気もしますが。

今回で修行編は最後です。

第十三話

やあ！俺ウィル！とうぞくを目指す一人の男の子さ！
今日も師匠のクライドさん指導のもと戦闘の訓練を続けているよ！
え？なんでこんなにうっとうしい話し方をするのかって？
決まっているじゃないか！眼の前の光景から目を背けたいがためだよ！

そう、今俺の視界いっぱいに広がるのは本当にに一人で投げたの？
と問い詰めたくなるような数のしゅりけん、しゅりけん、しゅりけん。

一応刃引きをしているので刺さる心配はないが当たると非常に痛い、
万が一股間にヒットしようものなら俺はお婿にいけなくなってしまう。
背筋に寒いものを覚えながらも集中し目の強化、避けるのが不可能と思われるしゅりけんのみを最低限の動きで弾いていく。

「うぉおおおおおお！」

カキィン！カキィン！カキィン！カキィン！カキィン！

手に持つ模擬刀で急所に投げられるしゅりけんをさばきつつ、その他は体と脚を使って回避していく。
ようやく全て対処し終わり一息つく、などという間もなく再び俺に向かって来るしゅりけん達…ってまたかよ！

さっきよりも速度が上がった鉄の塊が俺に襲いかかる。

もう訓練開始から結構な時間が経ったが、ずっとこんな状況が続いている、現実逃避だってしたくなるだろう…？
ちょっと遠い目をしながらまた迎撃の準備を始める。

あのグリズリーとの戦闘のあと大事をとってしばらくは休養していたが、傷も完治したため訓練を再開することになった。
ちなみになぜあそこにグリズリーがいたのかは未だにわかっておらず、クライドさんとアイラさんが調査に行ったが他の個体は見つからなかったようである。

そして改めて防御技術の大切さを思い知らされた俺は、クライドさんに頼んでそちらを重点的に鍛えてもらえるようにしてもらった。
敵の動きを見切り、隙を突いて倒すカウンター主体の戦闘方法を本格的に習うことにしたのである。

あとそれとは別にクライドさんの勧めによって、モモとの連携攻撃の訓練もはじめた。
あれだけ懐いているのならば意思の疎通は簡単だろうから試してみてはどうだと言われ、モモにも聞いてみたところやる気満々な様子だったのでお願いすることにした。

最初はお互いに気を使ってしまい動きもぎこちなかったが、どうやらモモはこちらの言葉を理解しているらしく、今ではかなりスムーズな連携をすることができている。
そろそろ俺たち専用の合体技でも考えようかなどとモモと話し合ったりしているくらいだ。

余談だがモモとの訓練をはじめた頃、インターセプターが拗ねてし

まったことがある。
どうやらかまってもらえなくなったことが面白くなかったようで、お詫びの意味も込めて全身を撫でくりまわしてやったら許してくれた。

最近ではモモとも仲良くやっているようで、今も背中にモモをのせて楽しそうに走り回っている。

そして現在はクライドさんとの模擬戦の真っ最中、様子見なのかひたすら遠距離で攻撃してくる。ただしどこから来るかはわからない、一瞬たりとも気を抜くことはできないのである。

飛んでくるしゅりけんをかわしきると、またもや俺に降り注ぐしゅりけん弾幕。

「だが見える！私にも鉄が見えるぞ！」

目が慣れてきたのか随分と遅く感じるしゅりけんを軽くさばく、さぁ次はどこからだ！

「戦闘の最中に随分余裕だな。」

その言葉と共に突然現れるクライドさん、しまった！今のしゅりけんはおとりか！
右手に逆手に持った模擬刀を水平に薙いでくる、なんとか反応が間に合った俺は手に持つ模擬刀でいなす。

この模擬刀ももちろん刃引きをしているので殺傷能力はないが、殴

られればもちろん痛い。
万が一股間にヒットしようものなら俺はお嫁にいけなくなってしまう。

そこからは右、左、上、下、斜めと連撃のオンパレード、防戦一方の俺は防ぐしかない。
なんとかくらわずに済んでいるのは日々の訓練の成果なのか、クライドさんが手加減をしているからか。おそらくは後者だろうが。

「どうした？守っているだけでは終わらんぞ？」

「くっ、わかってますよ！」

そう思うなら少しは攻撃の手を緩めてくれ！
ええいこうなったらヤケだ！せめて一撃くらいいれてやる！

攻撃と攻撃の間のわずかな隙を利用して後ろに下がり距離を取り、クライドさんが一瞬硬直したところにすかさず突っ込む、そこだ！
渾身の力を込めて模擬刀を振るう、回避が間に合わなかったのか動きの取れないクライドさんに攻撃が直撃する。

やった！と思ったら手応えが全くなくぐにゃあと姿がぶれて消える。

「残像だ。」

後ろから聞こえた声に反応する間もなく首につきつけられる模擬刀。
し、質量を持った残像だと…？

身動きのとれなくなった俺は両手を上げ模擬刀を手から離すと、

「参りました。」

そう言って模擬戦は終了した。今回も勝てなかったー！

今は先程の模擬戦の反省をしているところである。

「真正面から行うばかりが戦いではない、それはもちろん敵にも味方にも言えることだからな。注意することだ。」

「グリズリー戦の話を聞いたときにも思ったが、お前はどうやら搦め手に弱いようだな。」

つまりクライドさんの言いたいことはこういうことである。

俺は正攻法以外での戦い、グリズリー戦で言えばグリズリーがモモをおとりにしたような方法に翻弄されやすいらしい。さっきの模擬戦でも遅くなったしゅりけんに違和感を感じることができていれば、冷静に対処しその後の結果も変わっていたかもしれない。

特に俺のような卑怯と取られても仕方がない戦いをする奴もいるからな…と自嘲気味に語るクライドさん。それに対し俺は、

「そんな事ありませんよ！俺はクライドさんの戦い方尊敬してます！敵の隙をついて確実に倒す、それは卑怯でもなんでもないです！」

自分に自信を持ってください！と少し生意気なことを言ってしまったが、「そうか…。」と言ってそっぽを向いてしまった。もしかして照れてる？

最後に、あの連撃の中距離をとれたのは少々意外だった、それに関しては褒めてやるとぼそっと言って反省会は終わった。

現在は休憩中、俺とクライドさんは丸太の上に座っている。
今日も天気はよく、ぽかぽかとした陽気の中緑の芝生の上をモモとインターセプターがはしゃぎまわっている。

「それにしても…。」

「え？」

クライドさんが急に語りだす。

「よく俺のような者の訓練に今までついてきたな。」

何を言うのかと思えばそんなことか。

「そりゃあもちろん初めは不安でいっぱいでしたけどね、でも父さんの知り合いなら悪い人ではないだろうし、何よりクライドさんが俺のために色々してくれているのを知ってますから。」

そう、しゅりけんの時に使った人型もそうだが、本来なら大事な武器であるはずの小太刀やしゅりけんを訓練用に刃引きするなど、俺が強くなれるよう考えていてくれていたのを知っている。

「依頼とはいえあいつの息子を危険な目に合わせる訳にはいかないからな。」

一度怪我はさせてしまったが、と少し申し訳なさそうに言う。
まただ、普段訓練中は厳しいクライドさんだが、時々ものすごく優しい目をすることがある。
それは父さんが俺に向ける視線と似ていて、もしかしたら誰かに俺を重ねているのかもしれない、だから…
「そんなことは気にしないでください、それに父さんが二人できたみたいで俺も楽しいですよ。」
心からの言葉を伝える。あなたに出会えてよかったと、あなたが師であることを誇りに思うと。
驚いたように目を見開いた後、少し目を細めるクライドさん、表情は見えないがきっと笑っているのだろう。
ゆっくりと手を伸ばし俺の頭の上に持ってくる、そしてその手が頭に触れるか触れないかというところまで来た、のだが。
「おっと、そこまでだ！」
いきなり誰かの声が響き手を引いてしまうクライドさん、見上げると逆光で見えないが木の枝になにやら黒い影が立っている。
そしてその影はとぅっ！と言うと飛び上がり俺達の前に着地する。
「様々な経験をした俺が鮮やかに帰還！」
青いバンダナがトレードマークの我が父ロックその人であった。
「と、父さん！」

「おう、ウィル！今帰ったぞ！そしてクライド！ウィルは俺の息子だ！お前には渡さんぞ！」

ズビシッ！と指を突きつけて宣言する父さん、ちょっとは空気読もうよ…

「ロック…！貴様、相当痛い目にあいたいらしいな…！」

「お、やるか！どこからでもかかってこい！」

そう言って武器を構えて対峙する二人、クライドさん、それっていちげきのやいばじゃ…

戦いを遠巻きに見ながら先ほどのことを思い出す、直接手が触れることはなかったけど、でもさっきは確かにクライドさんの優しさに触れた気がする。そう感じるだけで嬉しくなってしまう自分がいて、頬が緩んでしまうのを止められなかった。

そういえばアリストはどうなったかな…

ｓｉｄｅ　アリスト

やあ！ボクアリスト！魔法剣士を目指す一人の恋する男の子さ！今日も師匠のアイラさん指導のもと戦闘の訓練を続けているよ！

え？どこかで聞いたことのある話し方だって？

そんな事言われても知らないよ！え？じゃあなんでこんなにうっとうしい話し方をするのかって？
決まっているじゃないか！眼の前の光景から目を背けたいがためだよ！

「そらそらそらそらそら！！」

眼の前には好戦的な笑みを浮かべながらつるぎのまいを繰り出すアイラさん。
初めて見た時よりもずっと速いその連撃が今まさにボクに襲いかかろうとしている。

あの事件から基礎のステップがまずなっていないということで初歩の初歩から始めることになったボク。
それからは来る日も来る日も子供のお遊戯用の踊りを踊り続ける日々。

ウィルにそっちの調子はどうなんだと聞かれるたびに、い、今はまだ基本かなと答えるのがどれだけ気まずかったことか！
アイラさんはアイラさんでボクの踊りを見るたびに力が抜けてしまうとかいって訓練どころじゃなかったし…。

でもようやくその現象も起きなくなってきたということで、やっと模擬戦を開始することになった。
これでやっとウィルに追いつける！最近はあのピンクの生き物との連携も訓練してるって言ってたし、遅れは取っていられないんだ！
だから気合を入れていこう！と思ってたんだけど…。

「ふふふ、今までよくもやってくれたねぇ！」

まるで親の敵を見つけた時のような嬉々とした表情で迫るアイラさん、だいぶストレスが溜まってたみたい。
ぼ、ボクが悪いの！？と言っても問答無用で模擬戦が開始され、今に至る。

「ほらほらぁ！まだまだ行くよぉ！」

凄まじい勢いで繰り出される攻撃をかろうじて受け流す、でも全く止むことのない追撃の嵐。
そしてとうとうはじき飛ばされるボクの剣、視界には剣を両手に握り直す動作をしている赤鬼。

あぁ…この状況なんて言ったらいいんだろう…？え？詰む？なるほど、いい表現だね！うん、ボク詰んだ！

どこからか聞こえた声に相槌を打ちながら、アイラさんに吹き飛ばされるボクでした…。

おまけ

「ふふふ、クライド！俺の新しい技を見せてやる！これを見ろ！」

「そ、それは…、まさか！」

「そうだ！今回の冒険で手に入れたげんじのこて！これで俺は幻の

二刀流！さぁ、いくぜクライド！」

「…貴様、武器は二本持っているのか？」

「え？…あ。」

「…。」

「…。」

「…ふん！」

「（ドゴォ！）ブルァァァァァ！！」

「これは俺がもらう。」

「…父さん…。」

クライドは　げんじのこてを　手にいれた！

第十三話（後書き）

今更ですけどヒロインいないですよね、男の娘と人外が候補になってますけどw
一応出す予定はあるんですけど現時点ではかなり後になって出ても空気になりそうな予感が…

さてなんとか毎日更新を続けてきましたが、次回からは少し忙しくなるため不定期になると思います。

思い出した時にでもチェックしていただけると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8167y/

Lv20

2011年12月1日01時52分発行